

ISSN 0913-0705

KULIC

22

1988. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 22

目 次

特集 資料保存

- | | | |
|----|--|---------|
| 1 | 大学図書館における資料の保存と保管 | 糸 賀 雅 児 |
| 6 | 過去10年間の情報センターにおける
年間受入冊数の推移と書庫スペースの現状 | |
| 7 | 科学技術系雑誌の寿命を調べてみると | 森 園 繁 |
| 12 | 日吉図書館における学部生図書 <small>の</small> 保存 | 和 田 幸 一 |
| 14 | 三田・ポーfum・文化的共同体<ティールーム> | 矢 野 久 |
| 15 | ドル安時代の円定価 | 小 屋 英 史 |

Bibliographic Instruction

- | | | |
|----|---------------------------|-----------------|
| 19 | 医学情報センターにおける
利用者教育 | 宮 崎 貞 治・市 古 みどり |
| 21 | 理工学情報センターにおける利用者教育 | 吉 川 智 江 |
| 24 | 法学情報処理 | 池 田 真 朗 |
| 27 | 図書館員として、プログラマとして<スタッフルーム> | 関 秀 行 |
| 28 | 本館所蔵 江戸中期の師宣風浮世絵版木 | 白 石 克 |

KULIC のノウハウ

- | | | |
|----|-------------------------------------|---------|
| 31 | 情報センター職員研修制度の発足 | 天 野 善 雄 |
| 36 | カード目録からカードレス目録への移行について | 中 島 紘 一 |
| 38 | シカゴ大学は特別さ
ービブリオグラフィック・インストラクションー | 市 古 健 次 |
| 41 | 大学と映画<ティールーム> | 橋 本 順 一 |
| 42 | トラブルとそれへの対応 | 渡 部 満 彦 |
| 44 | 看護短期大学図書室のオープンと今後の課題 | 市 古 みどり |
| 47 | 「長いものにはまかれよ」ということ
<スタッフルーム> | 永 崎 由紀子 |
| 48 | 私の図書館回想(3) | 笠 野 滋 |

<資料>

- | | | |
|------|-------------------|------------|
| 55 | 研究・教育情報センターに関する書誌 | |
| 56 | スタッフによる論文発表・研究発表 | |
| 58 | 年次統計要覧<昭和62年度> | |
| 裏表裏紙 | 中世大学図書館運営法の始まりを読む | 渋 川 雅 俊 |
| 62 | 編集後記 <表紙> 孫福 弘 | <カット> 大橋史子 |

特 集 資 料 保 存

大学図書館における

資料の保存と保管

糸 賀 雅 児

(慶應義塾大学文学部助手)

I. 資料保存問題の動向

図書館界では、ここ数年、図書館資料の保存に対する関心が高まっている。資料保存をテーマにしたシンポジウムや研究会もいくつか開かれるようになってきた。日本図書館協会では1985年に「資料保存研究会」を設け、継続的に保存問題を考える場とした。この研究会では、毎月定例会を開催し、情報交換の場として『資料保存研究会ニューズレター』を隔月で刊行している。

国立国会図書館にも「B. P. (Book Preservation) の会」なるものがあって、同様の活動を行っている。もちろん、国会図書館の資料の保存問題が中心に検討され、会のメンバーも同館の職員がほとんどのようだが、やはりニューズレター『BOOK PRESERVATION』(年3回)を1987年から刊行している。これらの他にも、資料保存問題を専ら扱う定期刊行物には、『ゆずり葉』かなや工房(1983年1月～休刊)、『コデックス通信』コデックス会(1986年4月～)、『本の保存のための海外ニューズ月報 CAP』CAP編集室(1986年8月～)などがあり、このテーマへの関心が徐々にではあるが、広まりつつあることを示している。

しかし、これらの研究会やグループで取り上げられているトピックの多くは、酸性紙問題を契機とする資料の劣化対策である。これは、酸性紙問題が単に図書館だけの問題ではなく、製紙会

社や印刷・出版業界、製本会社をも巻き込むわけて広範な関心事となったからであろう。酸性紙問題だけに限ってみれば、むしろ図書館の外側の方が熱心で、図書館界の対応は総じて鈍いと言わざるを得ない。

ところが、資料保存の問題を考えるにあたって、図書館が主体的に取り組まなくてはならない局面がある。それが本稿で扱おうとする、媒体の変換や保存場所の移動などによる図書館資料の保管問題である。図書、雑誌といった伝統的メディアの生産は相変わらず膨大であり、最近ではこれに加えてAV資料や種々の電子的メディアも、図書館資料として無視し得ない位置を占めるようになってきた。これに対して、図書館の書架収容力はそう簡単に増やせない。まして一方では、わが国の大学図書館における開架・閲覧スペースの増大、開架率の向上といった〈近代化〉も要請されており、資料の保管問題は、個々の大学図書館にとってきわめて切実な問題となっている。

さらに、データベースの導入に見られるような各種検索技術の向上、図書館相互協力の進展により、図書・雑誌論文等の一次情報へのアクセスをいかに確保するかも、今まで以上に重要な問題となりつつある。このことも、資料保存問題がクローズアップされてきた背景にあると見てよいだろう。昨年12月にサンフランシスコで開かれたModern Language Associationの年次大会で、通常の文学研究の他に関心を集めたテーマがオンライン・データベースと資料保存だった¹⁾、というニュースはそうした意味でも興味深い。どんなに情報技術を駆使し、正確な二次情報を検索したところで、求める一次情報そのものが入手できなくては何もならない。検索技術の向上が、図書館における資料保存およびそれへのアクセスの問題を浮かびあがらせる一つの要因となったのである。

II. 資料保存と資料保管

Harvard 大学 Tozzer 図書館の Evans は、図書館における資料保存対策として、次の10項目を挙げている²⁾。これらには、いわゆる資料劣化対策も含まれており、保存のための措置としてとり得るものはほぼ網羅されている。

- ① 問題を無視して、資料を従来通りの書架上に置いておく。
- ② 資料を廃棄する。
- ③ 中性紙によるリプリント版を求める。
- ④ マイクロフィルム化し、原本の扱いは別途検討する。
- ⑤ 光ディスクシステムに変換する。
- ⑥ 中性紙による複写をとり、原本の扱いは別途検討する。
- ⑦ 古本屋を通じて複本を求める。
- ⑧ 中性紙保存箱に入れて、従来通りの書架上に置いておく。
- ⑨ 所蔵場所を保存書庫に移す。
- ⑩ 資料を修復(脱酸化および強化)する。

これら10項目のうち、①は実際には対策といえない。他はいずれも、図書館が主体的に取り組める対策であるが、最近わが国の大学図書館でも実施例を増やしつつある④と⑨を中心に、ここでは検討していくことにする。

なお、保存問題を扱う際に、一般には preservation や conservation の訳語としての「資料保存」や「資料保護」などが使われている³⁾。しかし、これらは資料劣化対策を含めて論ずる場合の用語であり、本稿で扱おうとする媒体の変換や保存場所の移動についてだけを指す語としては適当でない。そこで、本稿では、これらの問題について「資料保管」という語を用いることにする。

III. 大学図書館における保存書庫

大学図書館における資料保管について、最も大きな問題は書庫(書架)がせまく、保管のスペースが足りない、ということである。例えば、1986年4月に東京近郊の大学図書館(10大学11館)を

表1 資料保存に関する緊急の課題(回答総数11件)

書庫狭隘	10 件
コピーによる破損	5 件
古書・古文書の虫食い	3 件
酸性紙劣化	3 件
湿気によるカビ等	2 件
本の切り取り	1 件
非図書資料の保存	1 件
空調設備	1 件

表2 書架余裕なしの対策

学内に別置	5 件
書庫の新設・増設	4 件
山積み	4 件
廃棄	1 件
書架の増設	1 件
キャンパス移動	1 件

対象に実施されたアンケート調査の結果⁴⁾の一部が表1と表2である。これによれば、緊急の課題のトップに挙げられているのは「書庫狭隘」であり、それへの対策として「学内に別置」「書庫の新設・増設」という保存書庫の設置が上位を占めている。

実際、都内の私大で保存書庫を設けた事例がいくつも見られる。よく知られたところでは、1982年4月より業務を開始した立教大学図書館新座保存書庫がある⁵⁾。これは池袋のメインキャンパスから約20km離れた埼玉県新座市に建てられたもので、延床面積2,760m²(うち書庫部分1,890m²)、収容能力は70万冊余りである。貸出し、複写については、緊急なもの以外、メインキャンパスに運んでサービスしている。運送手段は宅配便で、週2回。面白いのは職員配置で、メインキャンパスを離れての勤務は、孤独感・疎外感を覚え、心理的負担が少なくない。そこで、2名配置されているこの保存書庫の専任職員(他にアルバイト2名)は、おのおの週1.5日メインキャンパスで仕事をし、任期は2年を限度に全館員による交代制をとっているようだ。

東京女子医科大学図書館の場合には、雑誌パッ

クナンバーを保管するため、倉庫業者との間に「保存書庫」利用の契約を結んでいる⁶⁾。これにより同館では、1945年以前発行の和洋の雑誌6,775冊（書架にして54連相当分）を業者の倉庫に預けており、1冊あたりの保管料は1カ月20円程度となっている。倉庫からの取出しは、従来の利用状況や毎月の支払い額から判断して月3回としたそうである。すなわち、毎月3、13、23日を利用日とし、それぞれの利用日までの希望を一括して電話連絡すると、翌日には現物が図書館に届くというやり方である。したがって、利用者の待ち時間は、通常1日から11日となる。この場合に、その利用料金を利用者負担とはせず、すべて無料としている。ただし、実際には、学外の利用者からの相互貸借（複写依頼）がかなりあり、こうした利用者に対しては料金負担を検討せざるを得ないようだ。

上の2例はいずれも、1大学1図書館内での書庫狭隘に対する措置であり、対応策であった。これらと異なり、多くの学部・部局の図書室をもつ総合大学における組織的な保存書庫設置の経緯が最近報告されている。京都大学附属図書館の地下2階に設けられている保存書庫（約40万冊収容可能）がそれである⁷⁾。この書庫には、京大内で資料の移管を希望した9学部・8研究所・1センターの雑誌6,863タイトルのバックナンバーが集中保管されており、この保存書庫はバックナンバー・センターと呼ばれている。センターがオープンしたのは、新附属図書館の開館後約10カ月たった1985年1月であり、構想の具体化が決定されてから3年10カ月を要している。

この間、移管を希望する部局の数、そして雑誌タイトル数、冊数などの調査が行なわれ、綿密な準備がなされたようである。その結果、バックナンバー・センターに全学から移管された雑誌は142,945冊であり、うち実際にセンター内に配架されたのは115,723冊である。これは、原則として同一タイトルの重複配架を避け、各1セットのみを配架するようにしたため、約27,000冊が除籍

されたことによる。これにより、同一タイトルを複数部局から集め、欠巻・欠号を補って配架することが可能となり、利用者にとっては、数カ所の図書室をまわる不便がなくなった、ということである。つまり、センターの設立は、雑誌を移管した部局図書室の書架に余裕をもたせただけでなく、重複ナンバーの除籍により大学全体としての書架スペースも生み出し、さらには、利用者サービスの改善にもつながった、というわけである。

この京大バックナンバー・センター設立の理念と経緯は、同様の問題をかかえ、苦慮している多くの大学図書館にとって大いに参考となるだろう。実際、先のアンケート調査⁸⁾の他の設問には、「図書館資料を後世に伝えるやり方」を問うものがあり、その回答には「共同分担保存制度の確立」（6件）「共同委託による保存図書館の建設」（3件）が上位に挙げられている。デポジット・ライブラリと呼ばれるこの種の保存図書館（保存書庫）の必要性については、わが国でもかねてより唱えられていたが、手さぐりの状態から、ようやくその幾つかが実現するようになったわけである。

IV. 大学図書館における資料のマイクロ化

保存スペースを節約するために資料をマイクロ化すること自体は、かなり前から行なわれていた。しかし、それほど普及しなかったのは、解像度がよくない、利用のための機器の操作性がよくない、などの難点があったからである。ところが、最近ではマイクロ出版物も雑誌、会議資料、レポート類を中心に増えており、価格もハードコピーより割安となってきた。機器についても検索機能の自動化、高速化が進み、静電式のものも普及している。解像度の点で若干問題は残るにしても、保管対策として有力な手段の一つと見なされつつあるようだ⁹⁾。

特に、定期的に刊行される学術雑誌の場合、年間にかかりのペースで書架を占めていくことになる。自然科学分野の雑誌では、隔週発行のものも

珍しくないだけに、マイクロ化されることが多い⁹⁾。この場合、雑誌を初めからマイクロ版で購入する方法と、冊子体で購入したものを後でマイクロ化する方法とがある。しかし最近では、資料の劣化と増大に対する方策として、マイクロ化は自然科学分野の雑誌に限らず、広範囲にわたって検討されている。

最近の大がかりなマイクロ化の例として、早稲田大学の明治期資料マイクロ化計画がある¹⁰⁾。これは、同大学図書館が所蔵する1860年代後半から1910年代に刊行された図書資料類をマイクロ化しようとするものである。この対象となった資料は、国産パルプを原料として作った洋紙を使用していた時代のものがほとんどだという。国産パルプが使われ始めた1880年代から紙質が悪くなり、現在かなり劣化が進んでいるのである。これらの資料は、その稀少性からしても、マイクロ化が実施されれば廃棄されるという性質のものではないだろう。したがって、必ずしも「資料保管」だけの目的ではないのだが、マイクロ化の対象が、同大学に所蔵される明治期刊物約7万冊のすべてに及ぶとすれば、かなり大がかりなマイクロ化であることに変わりはない。

こうしたマイクロ化と、先に紹介したデポジット・ライブラリの概念とを結びつけた構想も、一方では進められている。最近の新聞報道によれば¹¹⁾、大手書店がアメリカのマイクロフィルム出版社と契約し、日本の大学図書館が所蔵する学術雑誌をマイクロ化して省スペース化を図る計画をもっているという。しかも、その際に、各図書館が所蔵していた雑誌の現物を一括して預かり、大学図書館間で共同利用できるようにするそうだ。つまり、各館は、今まで現物で所蔵していた雑誌をこのデポジット・ライブラリに預け、その代わりにそれらの雑誌をマイクロ化したものを受けとり、利用者からの直接の要求には、このマイクロフィルムで応じようというわけである。そして、現物にあたる必要があれば、それはデポジット・ライブラリまで出向くか、そこから取り寄せる

か、ということになるのであろう。アメリカの出版社によって供給されるマイクロフィルムの雑誌がどのような分野のもので、利用料金がどれ位になるのか分からないので、実現と普及の可能性について何とも言えない。しかし、アイデアとしては十分に面白く、実用化されれば、利用を検討する図書館は医学・理工学系を中心に相当数あるだろう。

V. 資料保管とネットワーク

「資料保管」の問題を、図書館が主体的に取り組まなくてはならない局面としてこれまで扱ってきた。しかし、最後の大手書店のアイデアにも示唆されるように、この問題は、多かれ少なかれ、図書館どうしの相互協力体制とも関わってくる。保管が問題になってくるのは、利用度が少ないけれども、全くアクセスの手段を無くしてはいけないような資料についてであることが多い。利用度が高いものについては、アクセスしやすい形体で当然その図書館が所蔵していなければならない。したがって、保管を検討すべき資料については、図書館相互の協力にもとづく分担収集や分担保存といった考え方も必要となってくる。

ところが、わが国の図書館界では、相互協力といっても相互貸借や相互利用が中心であり、最近ようやく目録ネットワークが普及し始めた段階である。分担保存も、公共図書館や専門図書館では一部で組織的に実施されているものの、複数の大学どうしでは、そうした例は少ない。先の早稲田大学のマイクロ化計画に対しても、その報告が掲載された雑誌の同一号の投書欄に¹²⁾、この計画が国立国会図書館の同様の計画と重複している事実が指摘されている。これら2つの計画には、それぞれの当事者である図書館の他に、書店、フィルム会社などが関与しており、それぞれが威信をかけて実施しようとしているだけに、相互の調整がうまく行かないようである。ちょうどこれと同じ時期に、アメリカの大学図書館ネットワークにおいては、協力して蔵書の preservation を行ない、

各館の受持ちの部分をもっとマイクロ化し、全体として地域的に無駄な重複をさける、という報告¹³⁾を読んだ。

この対照的な日米の実態は、資料保管問題へ取り組む基本的な姿勢の違いをよく示している。資料保管は、1館だけの取り組みではどうにもならない側面をもっており、いずれはネットワークの組上に載せていくべきものであろう。しかし、わが国のネットワークは未成熟である。当面は、各館が急場凌ぎをしていかなければならないものと思われる。

本稿執筆にあたって、資料の保存措置に関わる訳語について、安江明夫氏(国立国会図書館)に御教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。

- 1) Mihram, Danielle. "Online databases and book preservation" *College and Research Libraries News*, 49 (3): 152-3, March 1988.
- 2) Evans, G. Edward. *Developing Library and Information Center Collections*. 2nd ed. Libraries Unlimited, 1987, p. 362-3.
- 3) 上田修一. "資料保存の必要性とその対策" 図書館資料の保存とその対策(論集・図書館学研究の

- 歩み 第5集). 日外アソシエーツ, 1985, p. 6-27.
- 4) "保存"をめぐると対話. 図書館フォーラム, 1987, p. 52.
- 5) 小関昌男. "「立教大学図書館新座保存書庫」の発足とその問題点" *Library & Information Science News*, 34: 9-12, 1983.
- 6) 山根京. "実務紹介シリーズ・資料の保管スペースについて 東京女子医科大学図書館の場合——貸書庫の活用——" *薬学図書館*, 27 (4): 247-253, 1982.
- 7) 山中康行. "京都大学バックナンバー・センター" *大学図書館研究*, 32: 71-79, 1988.
- 8) 坂口薫. "情報の保存と図書館" *専門図書館*, 119: 1-5, 1988.
- 9) 篠原和子. "実務紹介シリーズ・資料の保管スペースについて 共立薬科大学図書館の場合——特にマイクロ化を中心にして——" *薬学図書館*, 27 (4): 259-262, 1982.
- 10) 山本信男. "早稲田大学の明治期資料マイクロ化計画(JMSTC)について" *図書館雑誌*, 82 (9): 588-9, 1988.
- 11) "丸善が'知の倉庫'" *東京新聞*, 1988年9月2日夕刊.
- 12) コデックス会, B. P. の会, "早大, ND Lの明治期刊行物マイクロ化計画について" *図書館雑誌* 82 (9): 603, 1988.
- 13) 森田一子. "アメリカの大学図書館の現状" *大学と学生*, 272: 12-16, 1988.

小 展 示 ニ ュ ー ス

昭和62年

12月10日～昭和63年1月31日

江戸・明治のおもちゃ絵—ボンコレクションより—

昭和63年

3月7日～3月19日

欧文書体の変遷(9-15世紀)

4月1日～4月30日

江戸時代中期の浮世絵版木

5月1日～5月25日

久保田万太郎生誕百年没後二十五年記念展

示

6月1日～7月12日

江戸時代響應にみる朝鮮親善使節

7月13日～8月13日

追悼 山本健吉展示

8月15日～9月3日

女性解放思想の古典展示

9月6日～9月30日

福沢諭吉の『帳合之法』とそれをめぐる資料展

過去10年間の情報センターにおける年間受入冊数の推移と書庫スペースの現状

第1表 過去10年間の年間受入冊数の推移

支 部 \ 年 度	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62
三田情報センター	50,030	50,459	58,104	63,737	78,047	70,373	64,063	84,781	88,729	81,622 (71,610)
日吉情報センター	14,543	15,693	17,555	20,441	22,930	22,533	26,308	24,206	23,094	25,574 (24,905)
医学情報センター	5,118	6,448	5,488	7,056	6,322	6,496	7,603	6,947	9,173	8,922 (3,735)
理工学情報センター	12,844	7,125	10,807	9,629	7,553	7,306	7,506	8,415	8,281	10,347 (10,261)
合 計	82,535	79,725	91,954	100,863	114,852	106,708	105,480	124,349	129,277	126,465 (115,511)

* 62年度 上段：含非図書資料 下段：除非図書資料

第2表 書庫スペースの現状

支 部	収蔵可能 量・現在 量	収 蔵 可 能 量 (千冊)		蔵 書 数 (冊) (62.3.31 現在)
		最 適 (書棚×25冊)	最 大 (書棚×30冊)	
三田情報センター (新 館) (旧 館) (研 究 室)		1,690 (1,000) (550) (140)	2,070 (1,200) (700) (170)	1,561,497
日吉情報センター (新 館) (藤 山) (新 保 存) ¹⁾		425 (370) (55) [72]	505 (440) (65) [87]	412,836
医学情報センター		163	195	197,546
理工学情報センター (松 下) (新 保 存) ²⁾		190 (190) [70]	230 (230) [85]	188,003
藤 沢 図 書 館		[230]	[280]	
合 計 新 増 加 加 算 ³⁾		2,468 [2,840]	3,000 [3,452]	2,359,882

- 1) 昭和63年度計画(予算申請済み)
- 2) 工学部創設50年記念事業として増設が決定されている。
- 3) 増設予定の日吉ならびに理工学図書館書庫を含む。

科学技術系雑誌の寿命を 調べてみると

森 園 繁
(理工学情報センター副所長)

I. はじめに

「科学技術系雑誌の寿命は短いといわれるが、複写依頼をみていると、古い雑誌もあんがい使われるように思えるんですがね……」

「確かにそうですね。でも、社会科学系の雑誌に比べたら、やはりみじかいのかな。実際がどうなのか、いつか調べてみましょうか。」

複写担当の人と、話合ってはや1年。以下は昭和62年度について、概略を「調べてみた」報告である。調べ方もいろいろあると思われるが、今回は問題の発端が複写に関係してのことでもあったので、複写、しかも学外サービスという、一側面に焦点を当てて見た。

II. 複写サービス

文献複写業務（いわゆるコピーサービス）は、現代の図書館活動で避けてはとおれない重要な仕事であり、科学技術の資料を扱う理工学系の図書館では特にそうである。20世紀、別名‘科学の世紀’の情報化は、雑誌に論文が発表されることが多く、その複写要求が絶えないからである。当理工学情報センターもその例外ではなく、利用者に提供しているサービスの中でも最もおおがかりなサービスとなっている。

さて、理工学情報センターの複写サービスを利用するには、次の二つの方法がある。

1. 理工学情報センターのカウンターで本人が直接申し込む学内サービスと、
2. 企業体などが郵便で申し込んでくるのを受け付ける学外サービスである。

学内サービスは、セルフサービスで本人が行う

ためもあり、申込用紙への記入がやや粗雑になるのを免れない。一方、学外からの依頼は、郵送で申し込むので、誌名、論文名、発行年を正確に記入してもらうため、なにが利用されたかを遡って調べる時は、きわめて有効な記録となる。また、利用者の心理を憶測すれば、複写文献入手には一定料金を支払い、その上ある期間を待たねばならず、そうしても読みたいとするのは、その文献への要求度が高いと判断できよう。

では、学外サービスで、理工学情報センターを利用するにはどうするか。それには、また次の2種類がある。

(1) 直接申し込む

研究者が自分の所属する企業および大学から、直接郵便で申し込む。その際、当センター発行の「理工学情報センター学術雑誌目録1984年」で所蔵を確認しておく。

したがって、1984年度の時点で、当センターが所蔵している全タイトルが対象となる。

(2) 日本科学技術情報センターを経由

理工学情報センターは大量の科学技術雑誌を日本科学技術情報センター(The Japan Information Center of Science and Technology: 略称 JICST ジクスト) から寄贈を受けているが、その雑誌への申込みは上述の「直接」のほか、JICST を経由して申し込まれてくる。詳細は後述。その各々の昭和62年度(62年4月~63年3月)の実績は、

直接申込み	15,078件
	内訳 企業 13,574件
	大学 1,504件
JICST 経由	18,064件
	計 33,142件

この数は、複写を返送した実数で、記入不正確等のための複写不能すなわち「謝絶」を含まない。

次に、件数の中味を雑誌の発行年を基準に分析すると、まず、

Ⅲ. 直接申込みの実績は、
 京浜工業地帯を中心に約140社の企業、および
 諸大学から当センターに複写依頼のあった15,078
 件を調べてみた。その結果をすべて掲げると、表
 1のとおりである。

表 1

年	件	年	件	年	件
1864	1	1927	11	1960	159
1887	1	1928	7	1961	143
1895	1	1929	8	1962	181
1897	1	1930	12	1963	203
1898	1	1931	13	1964	223
1899	1	1932	17	1965	284
1900	2	1933	10	1966	270
1901	1	1934	17	1967	334
1902	2	1935	21	1968	320
1903	0	1936	29	1969	374
1904	2	1937	27	1970	416
1905	1	1938	34	1971	396
1906	1	1939	23	1972	394
1907	2	1940	24	1973	270
1908	0	1941	16	1974	270
1909	2	1942	12	1975	312
1910	6	1943	13	1976	336
1911	1	1944	18	1977	330
1912	4	1945	19	1978	346
1913	5	1946	15	1979	425
1914	2	1947	23	1980	500
1915	1	1948	35	1981	525
1916	2	1949	42	1982	568
1917	0	1950	37	1983	619
1918	0	1951	45	1984	693
1919	2	1952	81	1985	1,020
1920	9	1953	77	1986	1,806
1921	6	1954	72	1987	1,864
1922	4	1955	99	1988	53
1923	4	1956	113		
1924	8	1957	123		
1925	8	1958	131		
1926	11	1959	128		
				計	15,078件

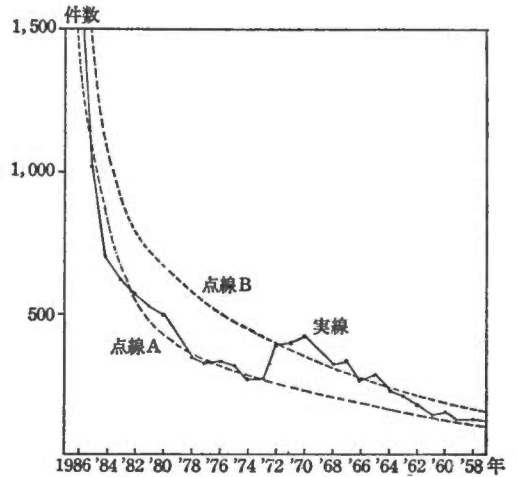
注：今回の調査は和洋合計である。

表をみていて、気づくことが多い。
 1900年以前が8件あること、1901年以降案件は

1903, 1908, 1917, 1918のわずか4年であること、
 1930年以降、すなわち58年前からはすでに2桁と
 なり、また32年前の1956年以降はすべて3桁台以
 上の申込みがあること、など。

そして、特に目を引くのは、1972年と73年の間
 に非常な落差が見られる点である。この前後を図
 示すると、図1の実線のようになる。

図 1



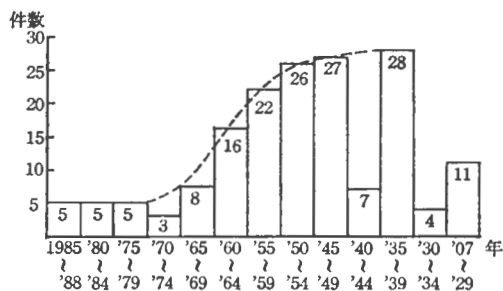
先にも触れたように、学外の企業、大学の利用
 者は、当センターの「学術雑誌目録1984」を参照
 して、目録にあるタイトルの複写を依頼してくる
 のであり、その万を越える母集団のデータを、グ
 ラフであらわせれば点線Aの曲線をえがくのが、普
 通であろう。しかし、その予想する曲線と異なっ
 た結果を示しているのは、1960年前後から1972年
 までの雑誌に理工学情報センターが“強い”から
 である。強い理由は、あらためて後述したいが、
 とにかく、この年代の雑誌をよく揃えて所蔵して
 いるので、したがって、要求もおおくなる。すな
 わち、“古い”と思われがちなバックナンバーも、
 持ってさえいれば、よく利用されるのであり、パ
 ックの収集につとめさえすれば、点線Bの可能性
 も十分に推測できる。雑誌の世界も多々益々弁
 ず、か。

IV. いろいろな雑誌がある

また、これは調査の道々気が付いたのであるが、ある種の雑誌は新しい所よりも古い号がよく利用されたり、一旦下がった利用曲線が途中からまた上昇するなど、一筋縄ではいかないことである。

そうした傾向を示す雑誌のなかで、ここでは2誌を取り上げてみたい。まず、アメリカ化学会(American Chemical Society) 1879年創刊の'Journal of American Chemical Society'の複写依頼計167件を、5年ごとにまとめたヒストグラムは図2のようである。

図2 Journal of American Chemical Society

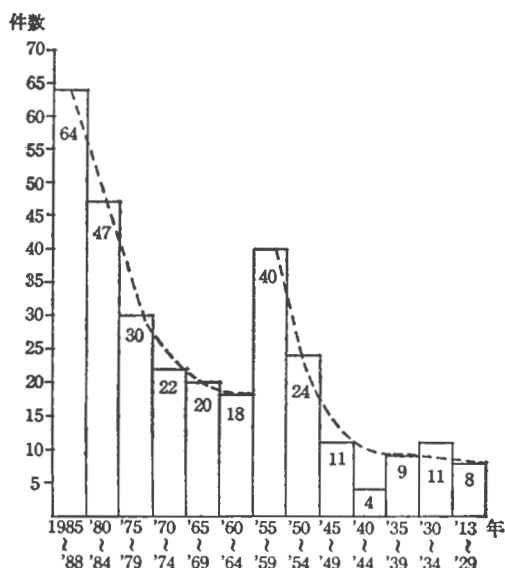


大戦期の1940~44年を除くと、1935年までは古くなるに比例して、却って利用が高くなっていく。すなわち、最近よりも30年前、40年前の方が申し込みがおおく、そのピークは実に50年前の1935~39年の古い古い年代である。

今一つの例は、アメリカ物理学会(American Physical Society) 1913年創刊の'Physical Review'である。今回の調査では308件と最も申し込みが多かった雑誌であるが、やはりその5年度ごとのヒストグラムは図3のようである。

この場合も、1940~44年の大戦期をのぞくと、1955~59年からまたあらたな曲線を描き始めているのが、きわめて特徴的である。戦後10年を経た1955~59年ごろは、物理学界が学問的にも、社会的にも、華やかな時期を迎えていた年代に一致す

図3 Physical Review



る。エサキダイオードでなじみの Leo Esaki (江崎玲於奈) が 'トンネル効果' を発表したのも、Physical Review 1958年1月号であった。Letters to the Editor 欄に掲載された、わずか1頁強の報告であるが、後のノーベル賞の対象となるほどの内容であったのを、覚えている人も少なくないであろう。自然科学でも、ある分野が一つの頂点に達するほどの時点での業績は、後代の人にとっては読み返す度に、読みを深めて行く刺激を備えているのか。

この二つの例は、或いは化学と物理学など基礎科学の極端な場合と、考えられるかもしれないが、必ずしもそうではないらしい。

理由としては、たとえば、一つ一つの雑誌にも、やはりそれぞれの寿命があるからであろう。その寿命は、その国の発展興隆の時期と大いに関係があるに相違ない。興隆期には内容のある質の高い論文が発表され、その利用は時と所を越えて生きていくのに違いなく、社会科学も自然科学もそれは同じである。事実、今度の調査でも年度が古くなるにしたがって、英語よりもドイツ語の雑誌が多くなるのも、第一次世界大戦前のドイツ帝

国の国運繁栄の遺産であろう。

両誌の申込み実数が低いといわれれば、それまでであるが、とにかく数十年前の古いバックナンバーもきちんと揃えて所蔵すれば、絶えず利用されることになる。

図1の概念図ですら、二つの曲線が混じっており、しかも、それを構成している各雑誌のデータを少し点検すると、Journal of American Chemical Society や Physical Review のように、普通の考えの逆をいく雑誌も存在するのであり、それを処理する日常業務では、‘古雑誌は予備書庫へお蔵入り’ともいわず、限られたスペースでの、書架の配架一つをとってみても、複雑な対応を迫られることになる。

次に、

V. 日本科学技術情報センター経由の実績は

最初のところで触れた、日本科学技術情報センター (JICST) からの寄贈雑誌について説明しながら、その申し込み状況を見てみたい。

昭和46年から同53年の8年間に、JICSTより理工学情報センターへ、科学技術雑誌の寄贈があった。昭和46年頃から毎年継続され、最終は同54年であった。中味は、1958(昭和33)年頃から1972(同47)年の期間に発行された和洋雑誌約5万冊である。貴重な資料が多く、理工学情報センターの雑誌コレクションに混配され、利用上は他の資料とも何ら区別がなく、当センターの雑誌に同化している。前節でみた、企業、大学からの申込みで1960年前後~72年の利用が突出している原因は、実はこの寄贈雑誌に依頼が寄せられるからである。

一方問題は、日本全国から、あるいは海外から、JICST が提供している文献検索を通じて、JICSTへ申し込まれた複写依頼の中、理工学情報センターへの寄贈雑誌該当分が当センターへ転送されてくることである。

したがって、「直接申込み」が理工学情報センター所蔵の全タイトルを対象としていたのと異なり、この場合は、1958年ごろから1972年まで15年

間のバックナンバーに限定される。その転送件数が、どう変化しているか過去9年間の状況を見ると、次のようである。

	件数	前年度比
1979年(昭和54年)度	18,518	
1980 (55)	16,412	- 2,106
1981 (56)	16,385	- 27
1982 (57)	15,571	- 814
1983 (58)	15,668	+ 97
1984 (59)	16,592	+ 924
1985 (60)	16,748	+ 156
1986 (61)	16,796	+ 48
1987 (62)	18,064	+ 1,268

30年位前から16年前発行の雑誌の利用であるから、減ってよさそうであるが、それが一向に減らない。そればかりか、ここ1~2年の実態は却って大幅に増えつつある。現に今年の4月~8月はすでに8,034件を数え、来年3月で締める時点では、はじめて1万9千件台になるのでは、と予測されるこのごろの忙しさである。

古いとイメージされるこうした年代の、科学技術雑誌の利用がふえている。なぜか。古い、新しいを問わず、科学技術系雑誌を取り巻く社会環境が変化しているのもおおきな要因であろう。‘サーチャー (searcher) の時代’ という言葉で象徴されるように、文献を検索する手段が、手近かに整備されつつあり、いわくコンピュータ、いわくパソコン、いわくLAN などなど、その恩恵はバックナンバーの科学技術情報の活性化にも、影響していると言えよう。そうして、一旦動きだした歯車は、情報が情報を生み、文献が文献を生み、その反復作用が止まらないのであろう。

一私立大学の一理工学部の情報センターの所蔵する科学技術雑誌への利用を、単に学外からの複写申込みをとおしてであるが、その一年間を観察した報告を略記してみた。もちろん、昭和62年度という限られた期間であるため、特別な事情も混在していることであろう。が、幾多のデータは、やはりバックナンバーの大切さを示していると思

われる。

しかも、毎日の利用では、学外複写はその一部分でしかない。学内の複写利用は当然のこととして、複写以外の利用も絶えず考えに入れなければならない、バックナンバーへの要求はいままで述べたデータより、何倍もおおいのである。

VI. 現場では

特に、図書館の現場で働く者には、バックナンバーが古くなると、それに比例して心理的負担も増していくのである。というのも、最新刊の雑誌は、カウンターの前の新着棚に、ここ10年分位のは1階の書架に、それより先10年分位は2階に配架されているが、さらにその前のバックナンバーは、設備の落ちる予備書庫（館によっては呼び方の異なる第二書庫、別館、保存書庫など）に置いてあり、複写機からは遠く、持ち出し返却には、不便を伴う場合が多いからである。30年、40年前の雑誌は、製本もいたみつつあり、紙質もわるく、それを新刊雑誌同様の仕上げに複写するのには、2倍3倍の労力と神経を使う。はじめの、「古い雑誌がよくつかわれる」との生の声は、こうした複写のトータル作業をハダで感じての言葉であろう。

実際に、今回の調査で一番古い雑誌を手にとって見た。日本ではまだ江戸時代の元治元年の1864年、ドイツプロシア帝国で発行された *Journal für praktische Chemie* の一論文である。酸性紙のためであろう、すっかり赤茶けた、まず活用を遠のいたと思われるこうした文献が、実際にまだ研究されているのを見ると、50年前であろうと、100年前であろうと、大事な雑誌はととのえておかなければと感じる。

そうして、情報をとりまく環境は今激しく動き

つつあり、これからは加速度的に変化していくであろう。所蔵していない資料は、パソコンのキーをたたいて、自由に入手できる時代が、あるいは来るかもしれない。しかし、現時点では、情報量の大きい所、すなわち大きな図書館や情報センターをもっている大学ほど、研究教育活動が活発である。

VII. おわりに

以上、学外からの要求を簡単ではあるが、発行年から分析してみた。一方、矢上台キャンパスにある理工学情報センターは、理工学部の研究、教育にサービスするのが、第一である。同キャンパスには、機械、電気、応用化学、計測、管理、数理、物理、化学の各専攻があり、専任教員約220名、3年生から博士課程まで3,000名強の学生が四季をとおして活動しており、この面の利用調査も行わなければ、いかにも片手落ちである。たとえば、

- (1) 理工学情報センター館内でのバックナンバーの利用はどうなっているのか、
- (2) 理工学情報センターで不足の資料は、どのタイトルの何年代の雑誌を他館に依頼しているのか、
- (3) 雑誌に限らず、図書も非常に激しい使われ方をするが、その実態は、などの分析。

今回の調査と、これらの調査を照らし合わせれば、問題がより深められるであろう。

と、書いてきて一休みしていると、複写係が、「今日も、JICSTのは、1958年のが20件もありますよ」

「相変わらず多いですね。また、予備書庫まで自転車で往復ですね。ご苦労さま。」

日吉図書館における 学部学生用図書の保存

和田 幸一
(日吉情報センター
パブリックサービス課)



1985年に新しく開館した日吉の図書館は、40万冊の収容能力がある。この中では、学部図書(研究者用)20万冊、図書館図書(日吉キャンパス在籍の教養課程の学部学生用)20万冊に大きく分か

れる。図書館図書(含製本雑誌)は、20万冊を超えない範囲で維持すると当初から計画された。

この20万という数字は、たぶんに図書館の物理的スペースからくるものである。しかし、教養課程の学部学生のための図書館としてのみ考えた場合、全く妥当を欠く訳でもなからう。米国の例だが、Metcalf¹⁾は、10万冊で学部学生の要求の90%、Dix²⁾は、8~10万タイトルで80%を満たせたとしている。しかし、カリキュラムが異なり、各分野の基本的図書リストが存在し、大学教科書といえ一般教育向の概説書を意味する米国とは事情が異なる。さらには、米国では同一キャンパス内の総合図書館の存在が前提になっている。だが、学部学生のうち教養課程の1・2年生のみを対象とし、学部図書が存在するし、塾内の他地区(三田・矢上・四谷)の図書館を総合図書館とすれば、20万という数字もあながち無茶とはいえないかもしれない。

ところで、図書館のスペースについて確認すれば、現在、図書館の地下1階に7万冊の収容能力を持つ書庫を建設中である。また、旧図書館である藤山記念館に6万7千冊分の書庫を持つ。ここには、1965年以前に出版された図書の大半を中心

とする図書館図書2万冊のほか、日吉キャンパスに点在する研究室の雑誌の一部のバックナンバー、既に書庫が満杯状態である矢上・四谷の図書館の蔵書が保存されている。これらの書庫は基本的には日吉の学部図書のための書庫として計画された。

さて、1987年度末現在、図書館図書は約20万5千冊(含製本雑誌、単行書のみでは約18万6千冊)。図書館の物理的スペースの限界とされる20万という数字は、実際より少なめに見積もっているし、藤山記念館への別置図書もあるので、書架にはまだ余裕はある。以後、雑誌を除いて考えてみる。1987年度、受入13,826冊に対して、除籍は444冊。このうち、亡失・破損・数量更正など物理的理由によるものは379冊(85.4%)、残りの65冊(14.6%)がその内容から判断して除籍されたものである。ここで内容とは、新版受入による旧版を指す。新版が完全に旧版の内容を包含する形で増補されているということである。これが、現在、日吉において行われている積極的除籍のただ1つの方法である。ただ、この方法も、その図書が書架に並んだ以降に書庫管理・閲覧業務を担当するP・S(パブリック・サービス)課員が、書架で気付いた範囲で行っているにすぎない。これでは、藤山記念館の別置図書はその対象とならないし、P・S課の繁忙期の試験期等には行われなくなる。

極言すれば、今後、毎年受入れた図書と同数の図書を除籍しなければならない状況を必ずしも否定できない。そのときには、現在の除籍の方法では全く追いつかない。そこで、除籍の基準として出版年を大きな柱とすることが考えられる。即ち、“図書を、その時々、その社会の要求に答えて、過去の学問の成果を踏まえて生まれてくるものとみるならば、新しい図書ほど役に立つはずであり、利用者の要求に答える³⁾”からである。貸出記録の分析からも、出版年の古い図書ほど利用率が低いことは明らかである。また、開架という条件で考えると、古い図書が多く書架に並ぶことは、

利用者にイメージダウンとなる可能性がある。

実際の除籍の手続としては、利用頻度が低く、出版年がある年以前のを、一冊一冊検討することが考えられる。その際、塾内他機関の所蔵の確認も必要だろう。そして、必要に応じて、塾内他機関での保存が検討されてよい。こうした作業のために、図書館の事務スペースとして、蔵書再編成室が設けられている。ここには、図書を並べて検討するための書架と、コンピュータに蓄積したデータを見る端末のための配線も設置されている。

この他、かつて教科書・参考書として指定され購入された複本の見直しも考えられる。新版受入の旧版除籍については、受入時点でのチェックをすべきであろう。

Stone⁴⁾は、除籍があまりなされない要因として、次の4つを挙げている。①単に所蔵冊数が図書館の質を示すという考え。②除籍以外の他の専門的業務にも忙しい。③図書は人類の知的遺産であり神聖なものだから捨てるべきではないという考え。④利用者が求める図書と図書館員が「良書」と判断したものが異なり、両方を保存の基準とはできない、といったような矛盾する除籍基準の存在。

このうち、②については、日吉の図書館では、深刻な状況といえる。日吉の図書館には、専任の選書担当者がおらず、また、受入はしたものの、未整理の図書が山となっている。87年度の除籍数でさえ、その除籍手続を行うT・S(テクニカル・サービス)課には負担になっている。選書・除籍を担当する人員が欲しいところである。(除籍も選書同様、図書の内容を判断するのだから、2つを兼ねることは望ましいと考えられる)

例えば、③についても、僕自身、図書を捨てるということにどうしてもなじめない部分がある。

図書をまたいでしまうと、気分が悪いということもある。そういう問題だろう。

実際に、20万冊という限られた図書を考えるとき、その図書そのものの質とともに、それを如何に利用者が活用できるかが大きな鍵となる。私は、利用指導の徹底・目録の充実がそのための手段となると思う。利用案内、オリエンテーション、まだまだ改善の余地がある。ファインディングリストとしてみれば、目録の記述はある程度簡略化されてもよからう。しかし、ファインディング=見つける、ためには、1つの図書により多くのアクセス・ポイントが必要ではないか。例えば、現在の日吉の目録では、福沢諭吉全集に含まれる西洋事情は、「西洋事情」という書名からは探せない。もちろん、この事実を利用者に徹底することも必要である。20万冊の中で、「探せない」と死蔵されてしまう図書の存在は許されない。活用如何で、20万が40万にもなるのではないか。

あと、2、3年以内に図書館図書の書架は満杯となる。除籍を中心に、もう一度全ての業務の見直しをすべきではないか。併せて、20万という数字についても。

引用文献

- 1) Metcalf, Keyes D.: Demand for materials and the threatened decline of support. Changing patterns of scholarship and the future research libraries. Philadelphia, University of Pensilvenia Press, 1951, p. 34.
- 2) Dix, Wiliam S.: 教授方法と図書館の利用, 第1回日米大学図書館会議議事録, p. 32 (1970).
- 3) 関 洋: 蔵書の年代別配架の背景; 日吉情報センター(藤山記念日吉図書館)の方向, KULIC, No. 12, p. 44.
- 4) Stole, Stanley J.: Weeding library collections -II. Littleton, Libraries Unlimited, 1982, p. 20-22.

三田・ポーfum・文化的共同体

矢野久

他大学と比較すると慶應義塾大学の図書館は学生がうるさい、ということをしつこく耳にする。実際に三田新図書館の中を歩いてみると、図書館は、学生が調べものをしたり、勉強したりする場所であるとともにたまり場としても利用されているという印象を受ける。たまり場であることに批判もあるが、キャンパス全体の空間と塾生間のコミュニケーションのあり様をながめれば、三田新図書館はすこしは違ってみえてくるかもしれない。

今から10年ほど前から約6年間、私は西ドイツ・ポーfum大学に留学していた。ポーfum大学は1960年代に設立された新しい大学である。学生数は慶應義塾大学と同じ位で、慶應義塾大学の全キャンパスが市郊外に一箇所に集められたようなものといっただけで、全部で13棟の鉄筋の巨大な建物の各棟の1階にはカフェテリアがあり、そこは昼食時、3時の休憩時には学生で混雑するが、学生食堂と同様、学生のたまり場といったものではなかったように思われる。

では、ポーfum大学の学生はどこで交流していたのだろうか。図書館に行ってみよう。キャンパスの中央に位置する中央図書館も各学部の専門図書館(室)も、その蔵書、雑誌論文は非常に頻りに利用されている。とはいえ、学生は図書館の中で書物や雑誌論文を読むというよりは、借り出したり、コピーしたりしている。したがって閲覧コーナーはいつもすいている。学生が図書館の中で雑談しているという姿もあまりみかけない。では学生はどこでコミュニケーションしているのだろうか。

学生の居住空間に眼をむけてみよう。彼らは大学周辺の学生寮に住むか、幾つかの部屋からなる住居を共同賃借・共同管理したりしていた。日本によくある男女別といった類のものではなく、もちろん男女混合である。この居住空間に学生が出入りし、そこで彼らは夜遅くまで議論する。友人に会いたければ大学ではなく住んでいる所へ行けばいいわけだ。

そういう所からいろいろなサークルが発生する。友人の輪が広がっていく。このような居住形態は、「ドイツ人は個人主義的である」という通念から一見かけ離れているように聞こえるかもしれない。しかし彼らは勉強する時には徹底して1人で勉強するし、研究上の重要なヒントをこういった形態を通して獲得している側面があるというのが私の実感である。ポーfum大学の学生のコミュニケーションの場は居住空間にあったというのが私の留学中の印象なのである。

三田の塾生に話を戻そう。首都圏の大学と同様に、慶應義塾大学の学生は居住空間における共同性を基本的に奪われている。そんな塾生にとってコミュニケーションの場はキャンパスと三田界限にしかないわけである。その三田界限も地価高騰によって昔の面影はますますなくなりつつある。学生街の喫茶店や雀荘で塾生がたむろすることもなくなり、したがって塾生のコミュニケーションの場でもなくなりつつあるように思われる。

とすれば、三田の塾生にとって唯一の共同性の空間はキャンパスにしかないといえよう。そのキャンパスのどこに彼らの共同性の空間があるのだろうか。三田キャンパスの空間的位置からいっても新図書館は学生のたまり場に最適の場所に位置している。というよりも、それ以外に学生にとって共同性の空間はないに等しいのである。その意味では新図書館は研究と情報のセンターであるばかりではなく、三田キャンパスの核でもあるといえよう。

したがって、コミュニケーションの場あるいは劇場的空間をもたない三田のキャンパスにおいては、新図書館はコミュニケーションの場という機能をもたざるをえないのである。三田の新図書館は確かにうるさいかもしれないが、それは半面活気があるということでもある。大学という知的・文化的共同体がそこから生みだされるのであれば、学生たちが図書館を勉強する場としてばかりでなく、コミュニケーションの場としても利用することも、あながち捨てたものではなからう。重要なことは、キャンパスという物的空間において、教員と職員と学生との間に研究・情報・教育・文化の知的空間が形成されることである。三田新図書館はそのための母体的位置を与えられているのである。(経済学部助手)

ドル安時代の円定価

小屋 英 史

(株式会社紀伊国屋書店)
五反田営業所 所長

I. はじめに

伝統ある KULIC 誌より標記のテーマについて書くようにとのお願いがありましたので、現場の責任者として書店の立場と考えを述べてみたいと思います。

円高差益の還元が叫ばれる中で、「洋書は高い」との御批判を受けています。そうした声にこの場をかりてお応え出来ればと思います。しかし、限られた紙数の中で舌足らずの説明は、却って皆様の御不満を増幅することにならないか？と強い不安と虞に躊躇する気持もあります。なんといいても価格の問題で多くの人に納得して戴けるような説明をすることは、極めて困難であると思います。よってご反論、ご叱正は他日頂くこととして、出来る限り率直に常識的な言葉で述べてみたいと思います。書店の活動に対する御理解の一助になれば幸いです。

II. 円高への対応

洋書輸入業者は実勢レートの変動にともない鋭意定価の改訂（円高への対応）に努めて参りました。ドルを例にとれば我が社は85年の3月以降実に10回に亘って価格の値下げを行なって来ました。この間、1ドルあたりの換算率は340円から現行の200円に至る間に40%もの値下げとなっております。価格の改訂にともない、高いレート時に仕入れた在庫品も値下げを致しますので、当社の受けた売上減は極めて多額に及んでいます。

他の業界に於てこのように迅速に、かつ大幅に円高差益の還元を努めている処は無い、と自負しております。

所謂円高差益の還元が社会的にも強く叫ばれ、行政当局に於ても指導・監督が厳しくなされて来ましたが、先般公正取引委員会より下記の見解が

国立大学関係者へ表明されました。私共の努力を認めて頂いたものとして意を強くしています。

- (1) 洋書業界はこの円高に良く対応していると評価している。
- (2) 業者から種々聴取して来たが、例えば各種資料作り、情報加工・提供などに相当経費が掛っている。こういう努力は評価すべきではないか？

III. 定価の設定

洋書については、書店が一定の原則に基づいて定価を設定しています。定価を設定しなければ、販売活動が出来ません。書店は単なる輸入代行業者ではない点を御理解願いたいと思います。

定価を設定するために、通貨ごとに換算率（レート）を決めますが、この時参考にするのは、設定時の直前3ヶ月の平均実勢レートであります。その平均実勢レートに一定の手数料を加え、更にレート変動の危険負担やその時々の経営環境などを考慮しながら決定して行きます。私共の販売諸経費は円で支払われますから手数料は一定以上のものが欲しい訳ですが、実勢レートの変動にともない換算率を見直すことによって、円高への対応をしていることとなります。なお、円高にともない円が全ての通貨に対して強くなったとの印象を持たれ勝ちですが、実際には円高とはドル安のことです。従って「洋書は高い」のではなく、ドル建のものは大幅に安くなったが、他の通貨についてはそうでもなかった、と云うのが実状であります。通関統計に占めるドル建もののシェアが仮に50%としますと85年当初に比較して全体では10%前後価格が下がったこととなります。

以下、表にドルの換算率の変更状況を掲げてみます。

7月の平均実勢レートは134.15でしたが換算率は200円のまま変更はしていません。設定時のレートより10円近くの円安となっておりますが、今のところ変更の予定はありません。私共としましては、あく迄変動が設定時の基準レートに対し、甚だしくかつ長期に亘っていなければ変更しない訳です。

設定時	平均実勢 レート	換 算 率
85. 3. 1	259.65	340
7. 29	242.84	330
11. 1	204.69	300
86. 1. 15	201.19	280
4. 14	176.60	260
7. 7	159.64	240
10. 6	157.02	230
87. 5. 11	141.55	220
88. 1. 13	128.68	210
5. 23	125.80	200

IV. 和書との対比で

御承知のように国内書の販売手数料は定価の22%程度であります。定価1,000円のもの販売しますと手数料として220円が入って来ることになります。この場合仕入れ値は780円ですから和書の場合の手数料は仕入れ値の1.28倍とも表現出来ます。

洋書店の役割は単に小売ばかりでなく、輸入貿易及び流通という両面の機能も果しています。和書の場合出版社から仕入れを行ない、全国津々浦々の小売店へ配達する役割を取次が行なっていますが、この取次の手数料は定価の7%程度でしょう。

洋書店の経営には従って定価の3割程度が必要になるとも言えます。即ち仕入れ値の140%以上の手数料がないと経営として成り立たないこととなります。加えて、和書販売と洋書販売には大きな相違点がありますので更に下記の点を考慮しなければなりません。

(1) 洋書は買切制であること。

洋書は返品が出来ない、と云う条件が洋書店の経営を大きく条件付けています。返品理由は様々ですが、毎年少なからざる量の本が返品されて来ています。勿論一部のものは出版社へ返品交渉しますが、殆どのものは在庫として再度販売活動しなければなりません。それでも相当のものがデッドストック化し、結局は欠減になる、と云う実態です。一方、和書の場合は委託販売が主であり

殆ど返品が可能であります。

(2) レート変動による危険負担が大きいこと。

先述の如く価格改訂にともない一物二価の状態を避けるため在庫品も同時に改訂します。極端な場合は340円で値付けしたものを200円へ改訂して販売することもあり得ます。

(3) カタログ作成などの様々なプロモーション活動が必要であること。

この点が洋書販売の最大の特徴でありますので後段で詳しく述べます。

以上3点の他にも相違点はありますが、要するに洋書販売の経営には和書に比し5%以上の手数料が必要であります。定価の35%程度の粗利益がないと十分なサービスが出来ません。しかも洋書市場(マーケットの規模)は価格の低下にともない拡大するものではなく、将来洋書購入層が飛躍的に増大する見込みもありません。円高の進展にともない総売上高は減少し、一方国内経費は上昇の一途を辿っています。

現行のドル換算率は200円ですが、大学へは180円で納入しております。一方実勢の方は現在133円ぐらいですから、一冊あたりの手数料額は47円となり、これは定価の23%程度で、和書に比し決して高い数字ではありません。私共としましては先述のように定価の35%程度の手数料を必要としていますが、人員の抑制、事務合理化などを強かに押し進め、なんとか凌いでいるのが現状です。

V. 外国ディーラーとの比較について

洋書業界にも市場開放の波が押し寄せて来ており、実際ベーカー&テラーなど外国ディーラー(以下「外資」)を使用し始めた得意先も多くなって来ました。それに従い双方のサービス内容の差も明確になって来たように見受けまますので、以下にその相違点をまとめてみます。

(1) 価 格 面

外資の方が安いと言えます。第一に外資は安い国内価格で仕入れていること。次に会社の規模が大きく仕入量が圧倒的に多量であり、大きな仕入

れ利差を得ているであろうこと。この2点に因り“安い”と云えると思います。

(2) 納品スピード

外資の方が早い場合も確かに多いが、国内業社と変わらない場合も多い、と云うのがユーザーの偽らざる声のようです。外資は日本で言えば東販・日販のような取次ですから、在庫のものは早いのも道理ですが、お客様の御注文が全て在庫している訳でもありません。その場合は我々と同じく出版社から一冊一冊仕入れるしかありません。

(3) 附帯サービス

洋書店は後述のように様々なカタログを作成して皆様にお届けしていますが、こうしたサービスはしていないようです。又、個々のユーザーに合った細かい附帯サービスは直接現場の担当者がやらなければなりません、外資の場合多くは数名の人員で日本事務所を経営しており、細かいニーズに応えるだけの人的余裕があるようには見受けられません。我が社の場合、多額の家賃や輸送コストを支払いながら、全国に営業所網を置き、お客様に密着しつつ肌理細かなサービスを続けています。

以上を総括しますと、私共国内業者は会社の規模では小さく、価格も一割程度高い代りに、小回りを生かして肌理細かいサービスを行なっていると言えます。外資は価格的には国内業者より1割程度安い代りに、情報提供やその他の附帯サービスが無く、その分だけ受入側、すなわち図書館や先生方の事務が増大することになると思います。又、日本的掛売も出来なくなり、ビジネスライクになって、かえって不便な点が多々出て来るのではないのでしょうか？

VI. 情報提供サービス

洋書の仕事で最も重要なものが情報提供サービスであると考えます。このサービス無くしては書店の存在価値すら無いと言っても過言ではありません。

書店には世界の様々な出版社、学協会より毎月膨大な量にのぼる学術出版情報が届きます。言語

も英、独、仏は勿論イタリア語、スペイン語、ロシア語など多種多様です。

私共は第一にこれらの学術情報を細大洩さず収集しようと努めています。このために情報前進寄地としてニューヨークとロンドンに事務所を置き、出版社との連絡・交渉に当たっています。

収集された情報は選別され、一定のカテゴリーに従って分類されます。例えば今月は国際経済の分野でどんな研究書が出ているのかを数ヶ国の出版情報に当たって調査する訳です。

分類された新刊情報はコンピュータによって即時入力し蓄積がなされて行きます。この蓄積された新刊情報は商品マスターと呼ばれますが、すでにその量は数十万件に達しています。又、この情報は我が社の KINO DIAL サービスによってユーザーの方が直接アクセスすることも可能となっています。

私共はこうした収集・蓄積によって、一刻も早くエンドユーザーの皆様へ最新の学術出版情報をお届けしようと多額の投資をしながら努めています。更に過去の関連情報も容易に御提供出来る態勢になっています。

私共の情報提供サービスの具体例としては様々な形でのカタログがあります。毎月の新刊情報を分野毎にまとめたアナウンスメントは最も基本的なものです。その他にブックニュース、重要文献目録、基本文献目録などを作成しています。

次に折角重要な情報をキャッチしても、肝心の研究者に知らせる術が無ければ宝の持ち腐れとなりますので、的確にエンドユーザーに届けるため下記のように実施しています。

まづ、届ける術と云えばダイレクト・メールが考えられます。実際毎月のアナウンスメントなどは多くこの方法によりお届けしております。しかし、私が申します情報提供はこうした表面的なサービスではありません。研究者にはそれぞれ個々の研究テーマがある筈です。このテーマに沿った情報提供を的確になし得てこそはじめて真の情報提供サービスが成されたと言えると思います。従って私共は、微力ではありますが試行錯誤を繰り返しかえしつつ、こうしたサービスを標榜し、努力を

重ねております。

そのためには、直接研究者の皆様にお会いして親しくお話を伺い、そのニーズの把握をすることがまづ肝要であります。そこで私共は担当者を配し、対応させて戴いています。例えば、ドビュッシーの研究をされていることを伺えば、関連の研究書ではどんな本が入手可能なのか、当時の雑誌はどんなものが出ていて古書市場で入手し得るものは何か、あるいはドビュッシーに関する博士論文で80年以降に発表されたもので入手可能なものは何か、などの情報提供が出来ます。流通情報と言うものは私共だけが提供出来る立場にあります。その意味で私共の機能は図書館の皆様のそれと相補的な関係にあるとも申せましょう。

Ⅶ. 未来への投資＝書店の社会的役割

書店の役割は御注文の本を届けるだけで十分と行かなくなって来ています。情報伝達の媒体が多様化しており、そのための研究投資が必要になっていきます。我が社は業界に先駆けてコンピュータによる文献検索サービス（ASK サービス）を始め、現在DIALOGサービスの他CD-ROMなどのニューメディア商品の開発に努力しています。又、図書館機械化の機運が盛りあがる中で蔵書のMT化が非常に大きなポイントになって来ていますが、我が社はすでに数年前にこの事業に着手し、その間巨額の研究投資を行なって来ました。こうした投資の成果で、皆様方の蔵書ファイル作成を安心してお任せ頂ける技術力も付いて来ました。更に昨年よりOCLCの代理店活動を始めましたが、このサービスも図書館機械化に取り組んでおられる皆様方の御好評を頂いています。しかしニューメディア商品は華々しく取り上げられる割には利益が上がらず、現在研究投資の状態で利益を上げるには程遠い状態にあります。

しかし私共は今こうした投資を行なわなければ日本の学術出版情報の流通が大きく立ち遅れるとの認識をもって、今後も努力していく所存であります。

Ⅷ. むすび

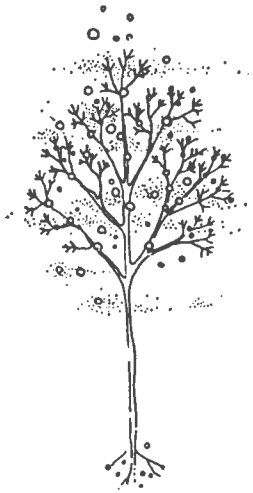
価格問題に始まって書店の役割にまで言及して来ましたが、以下に要約しますと次のようになります。第一に洋書店は他の業界に見られぬくらい機敏に円高へ対応して来たこと。第二は国内書に比し相当手数を要しているにも拘らず、現在の洋書の販売手数料は国内書並みの幅しかないこと。更に国内の洋書店は外資には期待出来ないような肌理細かいサービスを行なっていること、何よりも情報提供が書店の最大の命題であること。最後に書店の社会的役割として利益を投資してのニューメディアへの対応が日本の学術・文化の発展にとって不可欠であること。これらのことを述べて来ました。

私共としても、価格への皆様の御不満を解消すべく、御批判を謙虚に受け取め今後も引き下げに努力して参る所存です。社内の事務合理化を更に徹底して進める一方、外資の良い処を学びながら仕入面でも従来の発想に捉われること無く新しい道を探って参ります。

しかし、サービスに要するコストはあく迄も円で支払われますので、円高にともなう売上低下が極度に洋書店の経営を圧迫していることにも、何卒御理解賜りたいと思います。

最後となりましたが、日頃の皆様の御引立に深謝致しますと共に、単に売り手、買い手としての価格の高低のみならず、学術研究がより便利に、効率よく成果をあげるよう、我が国の洋書輸入業者への暖かい御理解と、育成への御叱正を賜わりたくお願い申し上げます。

医学情報センター における利用者教育



宮崎 貞治
(医学情報センター
総務担当係主任)

市古 みどり
(医学情報センター
情報サービス担当)

I. 概 要

現在、医学情報センターで実施している利用者教育は、「志木高等学校の医学部進学希望者に対する案内」、「EEP (Early Exposure Project)」、「看護短期大学新入生に対するオリエンテーション」、「厚生女子学院2年生に対する“文献利用法”の講義」がある。又、昨年迄は、「新専門課程1年生に対するオリエンテーション」が、医学部専門課程のガイダンスの一部として行われてきたが、今年からはEEP終了の学生が進学してきたので実施されなかった。

その他、希望があれば、各教室の新入医局員、新入看護婦、新入大学院生等にもオリエンテーションを行っている。

II. 志木高等学校の医学部進学希望者に対する案内

毎年12月初め、志木高等学校の医学部進学希望者に対し、医学部見学会の一部として行っているもので、情報サービスが担当。例年、教員1名が引率し、十数名の参加がある。利用案内、年次報告を配り、全体の説明をした後で、20分程度館内を案内・説明する。

III. E E P

1) EEPとは

EEPは、日吉地区の医学部進学課程の学生に対して、四谷地区の病院、一般事務部門等、医学部全体の各部局を体験学習させる、医学序論・医学特別コースのことで、その一環として医学情報センターも組み込まれている。昨年は初年度の為、春(対象2年生)と秋(対象1年生)の2期行われたが、今後は1年生を対象に、毎年後期に行われる予定である。

最初の3回は、全員を対象に講義形式で行われ、以降は7グループに学生を分けて、各部局でのEEPが開始され、7回にわたり研修が行われた。

時間は2時間で、最初の講義では医学情報センターの歴史、組織、施設等を説明し、続いて各担当の説明をし、目録の実際のひき方と主要二次資料の説明をした。次に学生を2組に分け、館内の見学を行い、その後、参考係で、一方はオンライン文献検索の実際を解説し、一方は目録を実際にひいて、書架で現物を探す実習を交互に行った。配布資料は、利用案内(きたさとニュースNo.105号掲載分)、61年度統計、組織図、建物概要。

2) 実施状況

毎回、EEP終了後に担当者がレポートを作成し、事務の担当である教務課に掲出した。それによると、1期、2期とも欠席者、遅刻者が多く、やりにくい所があった。講義中は、居眠り等、あまり態度はよくなかったが、その後の見学以降、特にオンライン検索では、興味を示すものも多く、質問もかなりでた。

一方、学生の方もレポートの作成提出が義務づけられており、提出されたレポートは教務課より回覧された。学生の反応は様々であるが、館内資料の多さと狭さ、外国文献の量の多さについて驚きを表現する者が多かった。又、日吉情報センターとの違いにもとまどいを見せ、オンライン文献検索にも興味を示していた。医学情報センターでのEEPに対しては概して好意的なものが多かったが、講義では今後、スライドやビデオなどを採り入れて、興味をもたせる工夫が必要である。

IV. 看護短期大学新入生に対するオリエンテーション

看護短期大学がこの4月に開校し、図書室は厚生女子学院図書室から短大新校舎へ移転した。この新しい図書室を利用して、新入生に対するオリエンテーションを実施した。このオリエンテーションは、1年生のみを対象に毎年行われるものであるが、本年は、新図書室オープンのため、厚生女子学院2年・3年生に対しても、改めてオリエンテーションを実施した。

約1時間を費やし、内容は、開館時間、閉館日、館内閲覧、館外貸出・返却手続き、目録、複写、医学情報センターの利用法等についての説明であった。

図書室は、座席数が76と学生数100に対して不足していたことや、未製本雑誌書架や目録ボックスが中央にあるなど、学生・説明者とともに不都合な部分もあったが、図書室を利用したことで、資料の配置に慣れてもらうとか、目録を実際にひいて書架に図書を探しに行くといった、説明だけでは不足する部分が補えたのではないかと感じている。

内容に関しては、1年生の4月の段階で、いわゆる Bibliographic Instruction にまで踏み込むことは不可能だと思われることや、2年生になってから週1回5週に渡って“文献利用法”の講義を受けることになっているため、こういった内容にとどまっている。

V. 厚生女子学院2年生に対する“文献利用法”の講義

厚生女子学院の3年生は、卒業論文を12月に提出する。そのため、2年生を対象に、毎年“文献利用法”という講義を医学情報センター職員が担当している。本年は6月から7月にかけて、講義を行った。

その主な内容は次のとおりであった。

- 1) 看護学調査・研究の方法
- 2) 看護における情報と文献

3) 一次情報と二次情報

4) 看護文献の探索

5) 文献カードの作成、論文の書き方（抄録の書き方、引用文献の書き方を含む）

そして最後に、レポートを提出してもらった。レポートは、各自が関心のあるテーマを選び、それに関する文献検索を行い、その手順を記録し、最後に文献リストをつけるというものであった。

講義は、約80人を対象に教室を使って行った。内容が、やや高度になり過ぎたことや、日頃のレポート等で忙しい2年生の段階では、あまり興味を持てる講義ではなかったようである。また、教室で行う授業という形式では、各種の資料を単に紹介する程度に留まってしまうことや、図書室には現時点では存在していない資料が多々あり、これらもその効果に対してマイナスの要因であったと思われる。

しかしながら、レポートの内容を見る限りでは引用文献の書き方等に不備は目だつものの、ポイントとなる資料を使って文献を集めており、今後に講義の成果を期待したい。

いずれにしても、講義の時期、内容、方法に改善が必要であることを痛感している。

VI. さいごに

日進月歩の医学分野において、生涯教育は大きな課題である。学生、研修医の時期に、文献の探し方や論文の書き方を確実に身につけておくことは、それ以降の研究活動に大きく影響する。従って、情報センターは研究者（看護婦、薬剤師、検査技師等も含む）が、将来にわたって貴重な時間を、有効に活用できるように、図書館サービスの種類、使い方、文献の探し方を、上手に教育する必要がある。そのためには、新しい情報メディアの利用法を組み込む等、実行可能な、魅力的な利用者教育プログラムを開発し、実施するよう、努力を重ねていくべきであろう。

理工学情報センター における利用者教育

吉川 智江

(日吉情報センター
テクニカルサービス課係主任
前理工学情報センター
パブリックサービス担当係主任)

I. はじめに

当センターが、利用者教育を“説明会”という積極的なかたちで開始したのは昭和57年(1982年)からである。

情報が世界中で、同次的に、しかも爆発的に生み出される科学技術の分野では、必要な情報を見つけ出し、収集することは、オリジナリティのある次なる研究にむけての重要なステップとなっている。そのため、医学と並び、理工学の分野では、古くから二次資料が発達し、情報処理システムが高度かつ複雑に発展を遂げてきた。この分野において、自立した、創造性をもつ研究者となるためには、今や情報処理技術の習得は無視出来ないものとなっている。

一方、理工学部の学生達は、3年生になると専門課程として日吉キャンパスからここ矢上台キャンパスに移り、4年次には研究室に所属する。また、1学年約1,000名のうち4割の者が修士課程へと進み、卒業後は学部で約7割、修士で8割近くが、研究職というジャンルに近い職種に就職するとみられている。しかし、彼らの中で入学までに図書館や資料について教えられた経験をもつ者は、恐らく多くはいないだろう。

こうした状況を配慮し、当センターでは図書館の持つ教育的側面を、研究者へのサービスと共に、従来より重視してきた。しかし、窓口など個別の対応では、内容的にも、人数の点からも限度がある。また、情報処理の技術は、本来体系的に、系統だって説明されるべきものである。まして、効率性や潜在的利用者の開拓を考えるなら、組織

だった利用者教育の有用性は明らかであった。

II. 3年生へのオリエンテーション

利用者教育を実施するに当たっては、まず新しい利用者である3年生を対象に、図書館案内の入門編とも言うべきオリエンテーションを企画した。図書館の資料、施設、サービス等を紹介したスライドを作成し、教室を会場に設定した。しかし、準備や宣伝の不足、場所の問題も手伝ってか、参加者は予想したようには集まらなかった。

その後、3年生に向けてのオリエンテーションは利用案内の配布を徹底し、20分前後の館内ツアーを申込により行うという方式を採用している。

III. 研究室別資料利用説明会

現在、当センターの利用者教育の中心をなすのは、“資料利用説明会”と銘うった研究室単位のビブリオグラフィック・インストラクションである。これについて、少し詳しく説明する。

資料利用説明会は、毎年4月から5月にかけて行う。館内、各学科、学部の掲示板にポスターを掲げ、図書委員の教員にも御協力頂き宣伝する。申込は研究室単位で、参加者は新しく研究室に入った4年生が主体となる。人数は、多くても1回25名前後である。要請があると、教員もしくは大学院生と、日時、内容、取り上げる資料等について打ち合わせる。所要時間は平均して1.5時間位で、場所は2階の閲覧室の一角を使用している。

テキストは、利用案内、資料の所蔵と探し方、当館所蔵の抄録・索引誌(主題別で6種)等の他、必要に応じて作成し、既製のテキストを利用する場合もある。実際の資料も出来る限り運び込む。

内容の概要は、次の通りである。

1) 情報の流れと資料。情報の発生と伝達を、時系列上にPRIVATEなコミュニケーションからPUBLICへと追い、その間生み出される各種資料について、研究分野の特徴を織り混ぜて説明する。参加者は情報の利用者であり、発生者でもある点に留意し、具体的には、カレントに目を通

しておくべき雑誌を紹介したり、特許のしくみについて触れたりする。

2) 当センターの利用案内。所蔵資料とその探し方、配置場所並びに貸出規則等の確認。

3) 情報の探索と主要抄録・索引誌。例えば化学なら、Chemical Abstractsを代表とし、現物を各自手にしてもらいながら、これら資料の位置付け、構成、索引、使い方等を解説する。事例は、卒業研究等身近な所から挙げてもらう。

4) 資料の入手。当センターにない資料の所蔵先、各種目録とその使い方、相互貸借と図書館サービス等。

5) オンライン情報検索。概要と事例。

6) 論文の作成。参考文献の書き方等。

最後に、各研究室のテーマに関連のある引用文献や抄録誌のコピーを見ながら要点を復習し、使用した資料を元に戻し、配架場所を確認して終わりとなる。研究室によって内容も説明も異なってくるが、いずれも1)と3)に重点を置いている。

説明会は開始されて6年目を迎える。カウンターからみても、2次資料の利用者が増えるなどその成果が次第に感じられるようになった。参加者は当初7学科10研究室116名であったが、今年度は4学科17研究室208名を数えた。表1はその内訳である。ここ数年、化学系、機械系の申込みが

多いが、彼らの中に説明会は徐々に定着しつつあるようだ。これらの学科は、センターが提供する他のサービスにおいても言わば“お得意さん”である。

アンケート等によると、大方の参加者が説明会の意義を充分認めてくれているものの、なお次のような当面の問題も指摘される。

1) 時間数の不足。専門課程として習得してもらいたい内容に対し、1.5時間では少なすぎる。勢い受講者には詰め込みすぎ、あるいは説明不足の感を与えてしまう。

2) 施設の問題。資料と隣接した所に、教室、AVホール、AV機器、パソコン等の施設や設備がなく、説明会に制約を受けることが多い。これらの施設は、今後新しい形態の資料を受け入れたら、授業や講演会のためにも活用出来る。

3) 準備時間の不足。パブリック部門全体で、アルバイト1名を含めて4名の職場では、目先の仕事に追われかねない。テキストやプログラムの整備、日頃のトレーニング等準備が不足すると、却って利用者の信頼を裏切り、マイナスの結果を生む危険性がある。

IV. 理工学情報センターにおける今後の利用者教育

現在我々が実施している利用者教育は、いずれもまだ模索の域を出ず、先にもあげたが多くの課題や制約を抱えている。ここでは、そうした点を考慮しつつ、幾つかの側面から、当センターにおける利用者教育の今後を探ってみたい。

利用者教育について考えるに当たっては、原点である目的を明確化し、それに沿った有効なプログラムを作成、整備していくことが重要である。利用者教育の目的は、前述したように理工学分野では、単に1大学の図書館利用案内に留まらず、生涯に渡る研究者としての情報処理技術の習得と言った観点から捉えたい。

1) プログラムの充実

理工学と一口に言っても、化学と数学、実験と

表1 資料利用説明会参加者内訳

年度 \ 学科	58年度		61年度		63年度	
	研*	人*	研	人	研	人
機械工学	1	12	3	37	5	60
電気工学	1	15	2	24	0	0
応用化学	2	28	5	68	6	73
計測工学	1	5	3	41	4	53
管理工学	2	43	1	14	0	0
数理学	2	10	0	0	0	0
物理	0	0	2	7	2	22
化学	1	3	0	0	0	0
計	10	116	16	191	17	208

* 研：研究室数、人：参加人数

理論、無機と有機化学では、資料だけでなく、情報との係わり方やその持つ重み等が、自ずと違っている。我々は、研究者の情報利用活動について調査、研究を重ね理解を深めると共に、それらを踏まえたきめ細かいプログラムを準備していかななくてはならない。即ち、情報の重要性をただ一様に説いたりすることは避けなければならない。説明会に不参加の研究室、学科に対しても、こうした面からの分析を加え、各々に合ったプログラムを作っていく必要がある。

また、現行の内容では主題に密着したより専門性の高い情報処理、例えば、特定分野の参考図書 の 解 題、デ ータ 集 の 解 説 等 未 だ 充 分 と は 言 い 難 い。研究室という単位は確かに主題で纏まっているのだが、100に近いその数に比べて我々担当者が少な過ぎ、参加者を増やしたり、一方で専門性を高くしていくためには、研究室の枠を越える等何らかの工夫が必要である。

一案としては、プログラムを基礎となる部分と専門性の高い部分で分けてもよい。前者は、共通部分として比較的大きなグループにし、少なくとも基本的な知識をより多くの人に習得してもらうことをめざす。後者は、各専門主題の必要度に応じてグループを段階的に用意し、参加者は主題や理解度に応じて適宜選択していくという柔軟性を持ったセミナー形式のプログラムとする。参加者にとって専門性を高くすると、一律に説明する場合ノイズが多くなる。また重複を必要最小限に止めたいので、内容的に類型化出来る単位をうまく作る必要がある。但し、広報活動は、あくまで研究室、学科主体とした方がよいだろう。現行のプログラムも、そうした角度から3年、4年次を通じて、カリキュラム等をも見定めながら、トータルな見直しをしていく必要がある。無論、日吉情報センターとの連携も忘れてはならない。

2) 説明法の工夫

出席者の理解は、説明の方法にも左右される。情報処理技術を習得するためには、“実際にやってみること”が最短の道であろう。そのためには演

習問題を課したり、授業、あるいは卒業研究とももっと密接な関係を持つべきである。テキストも、各分野毎にテーマを擬似体験出来るようにする等改善が必要である。

利用者がニーズに応じ、タイムリーに説明が受けられるという点では、カセットやビデオ、更にはパソコンを使った自学自習の方式もある。こうした各種のメディアは、使い次第で利用者教育の有効な補助手段として様々な可能性を与えてくれる。当センターでも導入とその利用法について考える時期が来ている。

3) 正課としての情報処理

現在日本の大学でも、情報処理を正課とするところが増えている。理工学部の時間割は、累積されていく知識で既にもう溢れそうである。そうした中で、化学科では3年生の必修課目“学生実験”で2時間を割いて担当教員が、Chemical Abstractsの講義をしている。図書館の説明会自体も、4年生の演習の時間かその前後が当てられる事が多い。情報処理技術の重要性が認識され、こうした枠が少しでも広がるよう期待したい。

正課としていくことで、情報処理は果たして誰が教えるかといった議論もある。理工学の情報処理の範囲をどう捉えるかにもよるが、私自身の経験から言わせていただくと、大学教育のレベルと目的に照らせば、情報、主題等それぞれの専門知識が不可欠だと考えられる。直接の教授者が誰になるにせよ、情報処理の性質上“専門家達が協力して事に当たる”という体制がより多くの成果を産むように思われる。

Beilstein (有機化学全書) を使いこなすにはやはり主題の知識が必要であり、情報の体系的アプローチは、図書館員が得意とするところである。説明会でも、引率の教員、大学院生は常によきアドバイザーでもあった。

4) 新しい波とオンライン情報検索

今後益々世の中が、高度情報化するにつれ、情報処理の解釈も内容も変化、拡大するであろう。

特に、ニューメディアの発達は、科学技術の情

報システムに大きな影響を与える。現に、オンライン情報検索は、情報へのアクセスに変革をもたらし、急速に普及しつつある。この面での利用者教育については、前号 (No. 21) の KULIC で詳しく述べられている。

理工学部では、説明会開催への要望が強く、昨年度その第1回目を開いた。メニュー方式等により、エンド・ユーザーへの便宜が計られつつあるが、研究者の側からも、こうした新しい技術を積極的に身につけていこうとする意欲が感じられる。一連の検索技術、知識に留まらず、情報の加工、保管等を含めて、その習得に対しては、図書館も利用者教育の一環としてプログラムの組織化と実行に力を入れて行かねばならない。教育的見地からみると抄録・索引誌等は、冊子体の利用を経てオンライン検索へ移行する方が基本や長短所が理解出来望ましい。しかし、今や利用者を取り巻く時代の波の方に追い抜かれそうである。また、オンライン検索は主題との関わりが強く、ここでも研究者との協力が必要となろう。

いずれにせよ、こうした時代の変化を的確に把握し、必要に応じて対応していくことが肝要である。

V. 終わりに

新学期が近づくと、また説明会の季節が来たなと思う。それは少々気忙しい季節ではあるが、またいろいろな出会いの時でもある。

図書館活動は、極言すれば、“人と情報の出会いを提供すること”にある。利用者への教育的な働きかけは、それを直接的ではなく、間接的に行っているという解釈も出来る。

説明会に出席したことで、利用者がカウンターへ質問に来るようになったり、2次資料に興味を抱いたり、あるいは卒業後ひょっこり何かの資料を思い出すかも知れない。教育は、それを身につけることで生涯の糧ともなる。

一方、資料の配置、表示、利用案内、目録、カウンターでの応対等々、利用者の目を持ち、その

立場に立って、いろいろ工夫したりするのも、そうした出会いを沢山経験して欲しいという気持ちからである。当センターでも、丸テーブル1つ置いて目録コーナーを作ったり、抄録誌を当年分机上に集めたりすると、資料が生き返ったり、新しい利用者がそこに目を止めたり、手にとって試行錯誤が始まったりする。我々はこうした日常の働きかけ一つ一つも大切にしたいと思う。

図書館では、研究室の先輩が後輩を連れて、資料の説明をしている姿をみかけることがあるが、こうしたキーパーソンへの働きかけも考えていきたい。

ところで、オリエンテーションも、説明会もこれらは、教員、学生、他センター等多くの協力と理解の上に成り立っている。翻ってみれば、こうした協力関係をいかに維持、発展させていくかが1つの鍵とも言えるだろう。我々としては、プログラム、内容共により充実するよう努め、まず実績を重ねていかねばならない。

利用者教育は利用者のためだけではなく、我々図書館員、ひいては図書館活動そのものにとっても得るものは大きいのだ。

法 学 情 報 処 理

池 田 真 朗

(慶應義塾大学法学部助教授)

I. はじめに

慶應義塾大学法学部法律学科では、昭和61年度より、2年生配当(半年2単位)の専門系列外科目として、「法学情報処理」と名付けた科目を新設し、今日に至っている。本稿は、その科目の概要と、設置後三年間の経過について報告することを目的としたものである。

この科目は、日吉の語学・一般教育科目を履修中の学生に対し、三田での専門科目、ことにゼミナールの学習にすぐに適応できるような準備をさ

せるという狙いで設置されたもので、図書館の利用法の講義に始まり、文献・情報の収集・検索法の講義と実習を中心にしつつ、法律学研究の手法についての総括的な入門講義の色彩も持ち、また受講者にとっては法律専門のレポートをおそらく入学以来最初に書く機会にもなっている。

II. 法律学研究と情報処理

周知のことかもしれないが、法律学の場合には、学問の基礎となる情報として、まず諸々の法規があり、つぎに日々多数言い渡される裁判所の判決（判例）があり、さらに学者や実務家が専門雑誌や大学紀要等に発表する論文等によって形成される学説がある。したがって、法律学においては、他の学問と同様に先人の業績の積み重ねを学ぶ必要があるのは勿論なのであるが、それに加えて、研究者も学生も、レベルの差こそあれ、上記の各種の情報をなるべく多く、正確にしかも迅速に把握し、取捨選択しなければならぬという要請があるのである。ここに、文科系の諸学問の中でも特に法律学にいわゆる Documentation の技術の学習が必要となる理由が存するといえる。

III. カリキュラムと担当者

したがって、本科目は、①最初から「法律学研究のための情報処理」という形で方向付けをした上で、②情報収集・検索の場としての図書館の利用法を講じることに始まり、③情報収集・検索法の一般理論を講じた上で、④法律学に関する資料の解説や引用・表記法などの講義を行い、さらに⑤法律論文の書き方等についてもインストラクションを与える、という手順で進行することになる。この、専門課程との連結という点において、本科目は、本塾大学で行われている他の類似の科目（文学部2年生および通信教育課程の「研究情報処理」¹⁾）と異なるということが出来る。

また本科目の人的構成上の特徴は、複数の担当者によるオムニバス形式を採っていることである。毎年、法学部法律学科の教授・助教授（名譽

教授）4～5名、文学部図書館情報学科の教授1名のスタッフが、情報センター職員の補助も得て、半年間の講義を交代で行っている。具体的なカリキュラムとその分担についていえば、63年度は、上記①②の部分を高鳥正夫名誉教授が情報センターの宮木さえみ・樋口恵子両氏の助力を得て担当し、ついで③の部分（講義時間の約半分を占める）を図書館情報学科の浜田敏郎教授が、その後④については、総論と公法分野に関して法律学科の小林節助教授、民事法の分野に関して筆者がそれぞれ担当し、最後に⑤を中心に法律学科の倉沢康一郎教授が講義するという形になっている。

IV. 講義とレポート

実際の講義に際しては、あらかじめ各担当者の用意した講義レジュメおよび資料（全部でB4判約30ページ）を実費で頒布し、それに基づいて講義を進行させている。また担当者はOHPの設備を利用して講義の能率を高めている。

受講した学生には、半年で2回のレポートの提出が義務付けられる。その内の1回は、法律関係に限らないテーマを任意に選択して書くもので、情報の収集・検索法一般についての実習に該当するものである。他の1回は、法律学（62・63年度は憲法か民法、61年度は憲法・民法・刑法のうち1つ）の具体的なテーマについての判例や学説上の論点に関するもので、情報の収集・検索法を実際に法律学の学習に活用し、加えて専門科目としての法律学のレポート作成を試みる実習に相当する。いずれのレポートの作成にあたっては、受講者一人一人が実際に図書館その他の機関を利用して情報収集・検索を行うことが重視されており、浜田教授の出題・採点にかかる前者のレポートの場合には、調査過程についての詳細な報告や、その中から得られた感想についての記述も要求されている。また、専門に関するレポートの場合も、例えば筆者の出題・採点にかかる民法関係のレポートの場合には、履修者各人の誕生日の月日（もしくはその前後数日）に言い渡しのあった判決を

一つ探し出し、それについての判決文・評釈等を集めて自分なりの解説を加えるという課題で、友人のレポートを利用して作成したりすることはまず困難となるような工夫がなされている。

V. 受講者の反応

幸いに学生の評判も良いようで、履修申告者数は、昭和61年度が183名、62年度が209名、63年度には495名と増加してきている。ただし、最初の2年間の履修者は、かなり良く勉強する学生がそろっていたようで、毎年、後期に全スタッフで開く検討会の席上でも、昨年度までは、受講者の意欲的な学習ぶりについての積極的な評価の声が多かったが、今年度の495名はいかにも急激な増加であり（法律学科の一学年は約600名である）、履修者のレベルについては全く疑念がないわけではない。また、受講者に課される2回のレポートという負担が適当であるかどうか今後検討を要するであろうし、もしこれが本物の人気で、今後も続くものとすれば、コマ数や教室の問題も議論しなければならなくなるであろう。

VI. 本科目の評価と今後の課題

本科目のここまでの成功の最大の原因は、科目設置の際の基本的なコンセプトが確立していたことと、スタッフに人を得たことにある、といてよい。具体的には、法律学専門の担当者と、情報学専門の担当者の共同指導体制がとれ、かつ現場のライブラリアンの熱心な協力が得られたことである。実際、専門に直結しない形での情報の収集・検索法の講義や演習の場合は、ともすれば受講者の目的意識が希薄になり、「何のための作業なのか」という疑問をもたせかねない。また、このような講義や演習が逆に専門サイドからのみ行われた場合は、どうしても担当者の専門分野に密着した角度からしか教育できず、体系的な情報処理法を身につけさせることができないという欠点が見れると予想される。これらの欠陥をうまく排除した本科目は、やはり図書館情報学科のある本

塾でなければできなかったものとも考えられるし、本科目設置の主唱者であった高鳥名誉教授（当時法学部教授兼情報センター所長）の慧眼を思うとともに、快い御協力を頂いている図書館情報学科の浜田教授に深甚の謝意を表するものである。

最後に、本科目の今後の課題として挙げられるのは、コンピューターの利用ということである。本科目は、現状では、情報源およびそのアクセスの方法として、コンピューターを実際に利用するところまでは進んでいない。しかし、最近はわが国でも、判例等のデータベースの開発が進んでいる。現時点ではまだ判例・学説等の情報を各法分野を網羅する形で完璧に入力したものは存在していないが、たとえばアメリカ合衆国のように、判例だけでなく主要法律雑誌掲載の論説までがほぼ完全に収録されたデータベースが普及するようになれば、これを導入して教育上にも利用する必要がでてこよう。具体的には、端末機をそろえた教室で、履修者各自がそれぞれのテーマに関する判例をキーワードで検索する実習等が加えられることが必要になろう。その場合は、判例データベースをどこが購入・管理していくか、教育施設はどのように整備するか等が問題になってくる。また、施設上の制約から、履修者数の制限等も考慮される必要がでてくるかもしれない。

いずれにしても、この「法学情報処理」は、法律学教育上必要不可欠の科目として定着して行くであろうと思われるし、またそうしなければならぬものと言ってよいであろう。今後も情報センター関係者の方々の御支援を切に願う次第である。

注

- 1) これらの学科目については、松本和子「研究情報処理カリキュラム」KULIC 21号17頁以下参照。

参考文献

池田 真明『「法学情報処理」の現状と課題』法学教室 91号（1988年4月号）34頁。

図書館員として、 プログラマとして

関 秀 行

図書館事務機械化の時流によって情報センターにおいても業務体形が様変わりしつつある。それにもないセンター職員の中にも、図書館員でありなおかつプログラマでもあるという人間がかなり増えてきた。プログラマと言い切ってしまうには多少抵抗があるが、システム開発担当とかコンピュータライブラリアンとかいうほど立派なものではないし、実際に作業をしている時はプログラマ以外の何者でもない。さて、私もそういうプログラマの一人であり、日常の整理業務と並行して機械化に携わっている。ただ、増えてきたとはいえ、まだ図書館内では少数派であり、プログラマが日頃どんな世界で仕事をしているかを知っている人は少ないと思う。図書館業務のプログラミングとはどういうものなのか、その一端を整理業務機械化の例を交えて紹介したい。

三田情報センターの本格的な機械化といえば、4年前から稼働している閲覧システムが最初である。この閲覧システムと比べると、整理業務つまりカタログギングの機械化の方がプログラマ泣かせである。データには固定長と可変長とがあり、プログラマにとっては扱うデータがどちらであるかによって天国と地獄ほどの差がある。もちろん、可変長の場合が地獄である。閲覧システムではデータは基本的に固定長であり、その点ではプログラムが書きやすいといえる。カタログギングの場合は、扱うデータの基本となる書誌データが通常可変長である。それも個々のフィールド単位で可変長であり、さらに、フィールドの数、繰り返し数などデータ一件ごとに違うのが当たり前である。

しかし、整理業務の機械化で最もシビアなのはデータ自体の複雑さなどではなく、現場からの要求であろう。日頃人間が行っているカタログギングを機械を使って実現することが要求されるわけで、一筋縄ではいかないことが多い。例として、洋書の書誌データを書名順に並べ変える（ソートする）という作

業を考えてみると、思いっただけでも次の4点を考慮しないと正確なソートができない。①コンピュータの世界では、同じ英字であっても大文字と小文字では全く違う文字として認識される（A=aではない）ので、英小文字をすべて大文字に変換する（もしくはその逆）、②書名の頭の冠詞は無視する、③ウムラウトやアクサンなどの特殊文字は何らかの変換を行う、④カンマ、ピリオド、コーテーションなどはソートの対象から省く、といったことである。これでも、著者名順の場合に比べればまだ楽である。

また、詳細な目録規則を使っている仕事のため、1文字1文字のレベルでのプログラミングが要求される。良い例として学術情報センター入力データからの目録カード打ち出しプログラムがある。これは機械可読の形で入力した書誌データから、日常手で作成しているカードを機械の力で打ち出そうというものである。このプログラムが一応の完成をみて業務に乗り始めた時は約2千ステップだったが、その後の現場からの要求に素直に答えてプログラムを修正していった結果、1年半たった今5千ステップを越えてしまった。使用言語がCOBOLであるとはいえ、単なる帳票出力のプログラムでこんなステップ数のものは滅多にあるまい。プログラミングという作業はその時間のほとんどが修正に費やされるといわれるが、まさにその通りである。

こんな調子だから、整理課にいながらほとんど本を整理しない日が続くこともある。プログラミングという作業は、始めはともかく、プログラムが完成に近づくと、頭がそれに占領されてしまう。目録をとっている最中、通勤の電車の中、食事中、ひどい時には夢の中でも、プログラムを考えていることがある。プログラミングの経験のない人は異常に思うだろうが、プログラミングをやると大概の人は同じ経験をしているようである。

図書館の機械化を内部開発で行うことに対する是非の論議はあると思うが、図書館員がプログラムを組む機会は今後増えていけよう。したがって今の私の関心事は、いかにプログラマのすそ野を広げていくかということである。そして有能なプログラマがいっぱい育って、ともに苦労を分かち合えるようになる、そういう環境ができれば最高である。

（三田情報センター整理課）

本館所蔵 江戸中期の師宣風浮世絵版木

白石 克
(三田情報センター特殊資料担当係主任)



第1図 阪木一オモチ面と考えられる「花見行列図」



第2図 「花見行列図」の新劇図



第3図 「弁慶牛若丸」の新劇図

この版木は縦 28.2 cm・横 61.2 cm、細長い所謂洗濯板判の形である。材質は桜であるが、彫り上げられてから二百数十年が過ぎ、永年墨刷りがなされていないせいか、すっかり乾き切り、きわめて軽い。絵は版木の両面に彫刻されるが、適切な画題がない。両図を仮に「花見行列図」「弁慶牛若丸」と称している。前者は印面がかなり傷み、凸面が欠けているところが多い。当時、随分刷られたせいか、細かに彫り上げたところには、磨滅したところが見うけられる。版木の左上方には題と思われる文字が刻まれるが刷りつぶれ、初行は全く不明、次行からは「御ぜん／とも>>□の／所」と読める。貴人の奥方の桜花見行列であろうが、これでは詳細がわからない。後者は五条の橋の上に繰広げられる弁慶と牛若丸の打合いを縦長の画面いっぱいにデザインしている。こちらの方は版木の傷みが比較的少ない。前者の「花見行列」の面が磨滅して刷れなくなってから、「弁慶牛若丸」を版木の裏に彫ったものと思われる。従って前者が彫られる面をオモテ面、後者をウラ面と呼び、話を進めていきたい。両面ともに彫りは粗く、江戸後期から明治期の版木に見られる浅く精緻なものではない。墨の色もこれらの時期のものとは異なり、時代を経たにぶい光沢が感じられる。オモテ面とウラ面では彫り方が一様ではない。弁慶牛若丸のウラ面は彫り下げた部分を、のみでほぼ平らに整えているのが特徴である。これは両者の用途が違うせいではないかと思われる。江戸時代後期の版木はかなり現存するが、元禄年間(1688~1704)以前の版木は少ない。比較調査する現存品がほとんどないので、版画資料として非常に価値あるものと思われる。この版木(第1図)の二隅には自然の割れではなく、人為的に切り去った跡がある。これは実際に使用されていた頃、版木の隅が傷み、その部分を切りとり、木片を貼り付け補修したところが剥がれたものと思われる。

今年3月、文京区に工房をもたれる高橋新治郎氏にこの古い版木を使って摺印していただいた。同氏は江戸時代より連綿と錦絵の副師職を継がれる家に生れ、五代目に当られる。この度は伊予奉

書紙と越前麻紙の二種類の料紙に摺印した。上の第2図・第3図は伊予奉書紙に刷られた新刷図である。

これらの新刷図を見ながら、次に製作年代等いくつかの問題点にふれていきたい。

(「花見行列図」—オモテ面 第1・2図)

新刷図をみても、上部の題字を読みとることはできない。版木ができたときに印刷された絵があれば都合がよいが、師宣の研究者として第一人者の鈴木重三氏(跡見女子大学教授)と木村八重子氏(都立中央図書館)に相談したところ、全く聞かないとお返事をいただいた。本図は御前(奥方或いは姫君)の乗る駕籠を中心にした花見行列図で、開花した桜の枝を持つ人々が随従している。槍持ちや荷物持ちが付き添っているところからみても、千姫のような高貴な方の行列であることが想像できる。本図に類似した絵には伝菱川師宣作「花見の図(日本浮世絵博物館蔵)」「江戸物参鉢」がある。同図の作者と推定される師宣(～元禄7年—1694)は浮世絵の始祖といわれ、現存最古の作品は寛文12年(1672)刊「武家百人一首」である。絵本の挿絵を多く描き、彼の作品は多く現存し、「国書絵目録」をみても150種以上掲載されている。これらの絵本類には彼の署名(或いは落款)が書かれるが、単独の一枚絵には名記されるものが少ない。本図の風俗をみると、髪形は男は若衆風の前髪を付け、中剃りをするものと、月代を広く後頭部まで剃り上げ、髷を小さくするものとの2種が見える。これは享保(1716~1736)より古い形と思われる。女は前髪や髷を小さく引きつめ、髷を長くしているのも、やはり享保以前、元禄(1688~1704)頃の姿であろう。着物の袖丈を見ても元禄頃と考えてよいものと思われる。師宣の著書「和国百女(元禄8年—1695—刊)」に所収される婦人の衣裳とも合致するところが多い。駕籠に乗る御前に従う人々の履物を見ると、侍や婦人は足袋を履き、槍持ちや荷物持ちは素足である。桜の花びらの描き方や着物の紋様もまた、前述の風俗同様に師宣の「花見の図」「江戸物参鉢」「和国百女」とかなり一致している。菅笠をかぶったり頭巾をつける道中姿は当時の絵

によく見ることができる。このように、これらの師宣の絵とよく似た画風であるので、本図の作者を師宣或いはその一門と、希望的には考えたいが、今のところ何ともいえない。“師宣風”といえは無難であろう。彼の署名のある絵本は前述のように沢山ある。恐らく師宣ひとりで描いたのではなく、師宣工房ともいえるグループの作品とも考えられる。画風が江戸中期というだけではなく、この版木は江戸後期のような時代の降るものではない。もう少し調査すれば、新たな事実がわかるかもしれない。

〔「弁慶牛若丸」—ウラ面 第3図〕

横長の版木を縦にして、上部に牛若丸、下方には目をむいて薙刀を振りまわす弁慶を描く。この細長い画面いっぱいにデフォルメされた構図は、初期浮世絵の時代には、武者絵などに流行していた。奥村派や初期鳥居派の作品に現存するものが多い。荒僧と稚児の争う話は弁慶・牛若だけでなく、当時の古浄瑠璃には「白川丹海」等いくつもあったようだ。こうした構図の絵は二人の姿から

早合点して、「弁慶牛若丸」と題されることが多く、疑問視されるものも随分あるが、本図はこの二人に間違いはないだろう。本図は師宣より少し時代の降る奥村正信の画風にも似ている。もちろん師宣にも、こういう筆致の挿絵がないわけではないが、奥村派や初期の鳥居派のように思われる。前述のように、この版木は彫り下げた底面がのみで平らに削られている。或いは玩具として部屋に飾られる武者絵の職用の版木であるかもしれない。陶砂を引きパリッとさせた紙ではなく、絹などの布に刷り込むために、底面の削り目が図面に刷られないよう、こういう彫り方をしたことも推測できる。上製品は絹に、並製品は紙に刷り込んでいたのかもしれない。しかしながら、現存する作品を見たことがないので、この考えは想像の域を出していない。

最後に、この版木の摺印を快く引き受けて下さった高橋新治郎氏と石井由貴子氏に、多大な感謝の意を表する次第である。

BOOK AUCTIONS: THE SPORT OF THE BOOK SALE

(第7回慶應義塾図書館講演会)

慶應義塾図書館講演会は、昭和57年図書館新館開館を契機に始められた。これまでも書物や図書館をテーマとし、内外の著名な講師を招いて開催してきたが、本年は、5月17日、ロンドンの古書籍商バーナード・クォーリッチ社より、取締役の一人であるリチャード・リネンサー氏を招いた。

英国におけるオークション（公開書物競売）のはじまりは、17世紀にさかのぼるが、書物好きの貴族たちの間でこれが注目されたのは、19世紀の初頭のロクスバラ公爵蔵書売り立てが契機になっているという。これ以降多くの貴族たちは、インキュナブラはじめ初期の活字印刷本の蒐集に狂奔し、そのために競売記録が次々と

塗り替えられることになった。19世紀中頃になると、貴族だけではなく、裕福な紳士たちが書物蒐集の競争に参入してくる。やがてそうした蒐集家を相手にする書店が現われてくる。ロンドンのクォーリッチ、米国のローゼンバッハなどの有力な書店が公開書物競売を席卷するようになる。

こうしたことが、昨年丸善がグーテンベルク聖書を落札したドヒーニ蔵書の売り立て、今年4月の物議を醸したマンチェスター大学ジョン・ライランド・コレクションの重複本売り立てなどにつながっている。また、このような展開をもつ公開競売の場が最近ではわが国でも開かれるようになった。

情報センター職員研修制度の発足

天 野 善 雄
(三田情報センター資料課長)

I. はじめに

情報センター職員の専門研修は、従来から盛んに行われてきている。図書館・情報学関係では、外部機関によって開催される研修会も多いため、一般事務部門のそれと比較してもかなり活発であると言えよう。しかしながらこれまでの研修は、ややもすると経験的に行われてきたきらいがあり、内容的にみても必ずしも情報センター職員研修として体系づけられていたとは言えない。このような研修の実態を反省し、より組織的に研修を実施、運営することを目指して、1987年6月に「情報センター職員研修計画検討委員会」が本部事務室の所管によって発足した。(以下検討委員会と略す)この検討委員会は、その後数次にわたり検討を重ねた結果、「情報センター職員研修計画(覚)」を立案し、同年11月に開催された副所長会議にこれを提出して承認を得た。(別掲)(以下研修計画と略す)同会議の承認によって、1988年度より、情報センターの職員研修は、この研修計画に沿って実施、運営されることになり、その第一段階として、1988年6月には情報センター職員研修委員会が正式に発足する運びとなった。(以下研修委員会と略す)

本稿では、研修委員会発足に至る経緯を報告すると同時に、研修計画に盛り込まれた内容と趣旨を、検討委員会での議論を中心に紹介することとした。

II. 職員研修見直しの背景

検討委員会では、何故この時期に職員研修の見直しをする必要があるのか、という基本的な問題から議論を開始した。

情報センター職員に対する研修は色々な方法で実施され、多くの職員がその機会を得ている。しかしながら現行の研修実態は、必ずしも情報センター全体として組織的、体系的に行われているのではなく、長い歳月の間に、経験的に積重ねられてきた結果であるにすぎない。そのような実態の中で、研修によっては、惰性のまま行われていたり、その目標が曖昧であったり不明確であったりするために、研修そのものが実態を失い形骸化しているものも少なくない。また研修を受けた職員が研修結果を上司に報告したり、研修成果を組織にフィードバックする仕組みが不十分なままになっているため、研修と人材育成(人事計画)とがうまくかみ合っていない。

こうした状況を打破するためには、研修目的を明確にし、研修プログラムを体系づけ、研修成果と人事計画との関連性をもたせた情報センター職員のための研修制度を確立する必要があるのではないだろうか。情報センターのサービス機能を向上させ、情報センターの目的を充足させるためには、専門職集団である情報センター職員に効果的な研修の機会が与えられ、その結果個々の職員の能力を向上させることが、最も基本的かつ具体的な施策であると言えよう。

一方一般事務部門の職員研修を所管する人事部でも「職員研修に関する実施要領」ならびに「職員海外研修(長期)実施要領」を1988年4月より施行することになった。情報センターの職員研修は、この実施要領の部門別研修と位置づけられていることから、情報センターとしても整備された研修制度を確立させることは、時宜を得たものと言えるのではないだろうか。

III. 当面取組むべき課題

情報センター職員研修制度を確立するために、当面取組まなければならない課題として、以下の点が検討委員会で上げられた。

1) 現行プログラムのサーベイ

現在実施されている職員研修の内容を洗い出

し、それらにおける問題点を分析する。

2) 研修目標の設定

研修目標をどのように設定するかということは、研修計画の根幹をなす重要な問題である。同時にこのことは、研修を受ける職員に求められている資質がどのようなものであるかということと密接に関連している。このため情報センター職員に現在求められている資質を克明に分析することによって研修目標を明確にしていく。

3) 研修内容の再検討

個々の職員が一定の時系列に従って研修を受けられるよう、研修内容の体系化を図る。

4) 一般職員研修計画との整合性

情報センター職員といえども、人事部の所管する一般職員研修計画の対象者である。従って一般職員研修計画との整合性に留意した上で情報センター職員の研修制度を立案する。

5) 情報センター人事計画との関連性

職員研修計画と人事計画は本来密接不離の関係にある。昇格人事や異動人事を検討する際、過去にどのような研修を受け、どのような成果をあげているかといった情報を参照できるような研修制度を立案しなければならない。そのためには研修そのものの内容やレベルを客観的に評価できると同時に、個々の職員が研修で得た成果をも評価できるメカニズムを制度の中に盛り込む必要がある。

IV. 情報センター職員に求められている資質

検討委員会は、既述した当面の課題のうち、特に研修目標をどのように設定するかという点に議論を集中させた。このことは、取りも直さず研修を受ける情報センター職員にどのような資質が求められているかを明確にすることになるからである。情報センター職員に求められている資質として検討委員会の総意は以下のように集約された。

1) 実務的に必要な資質

a. 担当職務遂行のための知識

- i. 日常ルーティンに必要な基本的知識
- ii. 主題専門知識

- b. 情報処理技術（ドキュメンテーション、プログラミング、オンライン検索技術等）
- c. 業務管理、運営に関する能力
- d. 外部環境への適応能力
 - i. 学問研究としての図書館・情報学
 - ii. 学・協会、団体等の動向、コミュニケーション（国内、国外）

2) 理念的に必要な資質

- a. 専門職としての意識改革、能力開発
- b. 国際感覚の養成

以上のような資質を備えた職員を、情報センター全体でバランスよく養成していくことが、情報センター職員研修の目標を達成することにつながるのではないだろうか。

このように取りまとめられた考え方は、後日研修計画を立案する際、研修内容の基本的な枠組となっていった。

V. 研修計画の立案

以上のような議論を経て、検討委員会は、研修制度の骨格となるべき研修計画案の検討に入った。研修計画は数次にわたって変更され、修正が加えられた上、漸く1987年11月1日付で検討委員会としての成案を得るに至った。

研修計画を立案するにあたって最も留意した点は、専門職であるべき情報センター職員に対して、何故研修制度が必要なのかを明確にしておくことであった。この点について検討委員会は、専門職は常に自己啓発が求められているという認識に立つ一方で、専門職教育で得られた知識や技術がたちまち陳腐化してしまうような近年の情報環境の著しい変化の下では、これを防ぐために、組織体としての情報センターが積極的に職員に研修の機会を提供する必要がある、との立場をとった。研修計画の本文に入る前に“はじめに”という欄を設けて、この考え方を明らかにしておいた。

研修計画の本文は、i) 研修の目的と基本方針、ii) 研修内容、iii) 研修方法、iv) 研修計画の管理、運営の4項目に区分した。研修の目的と

基本方針では、情報センター職員研修を義塾職員研修の部門別研修と位置づけると同時に、職員の専門職としての知識、技術及び意識を高めることを最大の目的とした。また基本方針としては、既述した当面の課題で議論された項目を出来るだけ盛り込んだ。研修内容では、情報センター職員に求められる資質として取りまとめた内容を、専門的知識と技術、主題知識、外国語とに整理して組入れる結果となった。研修方法の部分には、毎年度立案される研修計画を当てはめることになる。研修計画の管理、運営の部分では、研修制度を効率よく走らせるための研修委員会の設置と、既存の副所長会議及び研修委員会の、研修に関する役割分担を明確にした。

VI. 研修委員会の発足

1987年11月に開催された副所長会議に研修計画案を提出し、承認を受けた結果、検討委員会は事実上その役割を終えたため解散した。1988年4月から正式に情報センター職員研修制度が、研修計画に沿って運用されることになったが、その第一段階として同年6月に研修委員会が発足した。

新たに発足した研修委員会には、1989年度の研修計画を立案することが当面の職務として要請されている。と同時に正式発足したばかりの研修制度を円滑に軌道に乗せるために、研修委員会は、とりあえず以下の事項の取りまとめを行った。

1) 研修委員会の基本的業務

研修計画に盛り込まれた研修委員会の役割を以下の通り具体化し、今後の研修委員会の行動指針とすることにした。

a. 定期的な研修計画の策定と評価

義塾の実情に応じた研修計画を毎年度策定し、実施する。また計画の内容を定期的に検討し、評価を行う。

b. 情報センターの将来動向の把握

情報センターが将来どのような方向性を持つのかを、短期、中期、長期的に把握し、新しい動向に必要な能力を養成できる

よう、柔軟に研修計画を策定する。

c. 職員個々のキャリアに応じたプログラムの開発

職員個々の持っている教育歴、研修歴に応じた適切なプログラムを開発する。

d. 義塾としての独自プログラムの開発調査

既存の独自プログラムを評価、分析すると同時に、大学固有の環境の中で新規の独自プログラム開発の可否を調査する。

e. 外部団体主催の研修プログラムの評価

現在どのような内容、レベルのプログラムが用意されているかを客観的に調査し、これをどのように利用するかを吟味する。

2) 研修内容の区分

既存の研修内容をリストアップして検討した結果、所管部署に応じて研修を以下のように区分することになった。即ち、i) 本部所管の研修、ii) 支部センター所管で本部の調整を要する研修、iii) 支部センター所管の研修、の3段階である。今後新規に加わる研修についても、この3段階に区分して管理していくことになる。

3) 研修報告システムの導入

支部センターによっては部分的に研修報告が行われていたようであるが、全体としては特に定められたルールや書式はこれまでになかった。研修報告がないと、研修内容の評価や研修成果の評価が充分に行えないことになる。すべての研修を対象に報告書を提出する必要はないが、主要なものは、研修の内容とその成果について報告するのが当然であろう。報告のうち、上述した研修区分のi)、ii)レベルについては所属長(副所長)を経由して本部で収集し、iii)レベルについては支部センターで収集し、それぞれで管理することになろう。現在研修委員会ではセンター共通の報告書式を作成している。なお研修によっては、これまでも報告会が行われていたが、今後は報告会形式もできるだけ多く採用していくことになろう。

4) 研修ファイルの整備

今後作成される研修計画では、職員個々のキャ

リアに応じた内容が求められ、なおかつ研修実績と人事計画とに関連性をもたせるのだとすれば、当然職員個々の研修ファイルを整備していかなければならないであろう。但し研修ファイルを維持するという事は、個人の人事上のプライバシーとも密接に関連することなので、研修委員会は直接タッチせず、本部自らがこれを作成、管理していくことになる。研修委員会としては、各支部センター職員の研修実績を洩れのないように本部に伝達することが、このことに関する主な任務であると認識している。

Ⅶ. 今後の課題

新たに発足したばかりの研修制度であるため、研修委員会としても、何から、どのように手をつけたらよいのかもはっきりしない、いわば暗中模索の状態にある。職員の中には、研修制度などと改まって言わなくても、これまで特別な問題もなく実施してきた実態があるではないかといった意見を持つ人も多いのではないだろうか。新たに立案された研修計画が、これまでの研修実績を否定する立場で作成されたものではなく、あくまでも実績の上に立って作成されていることは間違いないところである。この考え方は、検討委員会、研修委員会と一貫して変わっていない。但しこれまでの研修実態の中で反省すべき点は反省し、不足していた部分があればこれを埋めていこうというのが基本的な姿勢であった。

研修委員会が当面考慮しなければならないことは、この研修制度の内容と趣旨について、全センター職員に周知徹底を図り、多くの理解を得るための方策を講じることではないだろうか。そのためには、本稿のように KULIC 誌上を通じて定期的に研修委員会の動向を報告することも必要である。また、研修委員一人一人が、各支部センターで研修について職員と意見交換を活発に行うことも必要であろう。そういう中から研修計画に取込める斬新なアイデアも生まれてくるだろうし、研修計画が多くの職員の意向を反映したものに育っ

ていくことも期待される。いずれにせよ、制度そのものが情報センター全体にうまく定着するように努力をすることが、当面研修委員会に課せられた最大の課題であると言えよう。

なお研修計画案を作成して解散した検討委員会と新たに発足した研修委員会のメンバーは以下の通りである。

情報センター職員研修検討委員会

(1987年7月発足、同年11月解散)

渋川雅俊(本部) 天野善雄(三田情セ)(主査)
武 正恒(日吉情セ) 宮木さえみ(三田情セ)
酒井明夫(医学情セ) 吉川智江(日吉情セ)

情報センター職員研修委員会

(1988年6月発足、任期2年)

渋川雅俊(本部) 天野善雄(三田情セ)(主査)
平尾行蔵(三田情セ) 吉川智江(日吉情セ)
館田鶴子(医学情セ) 宮入暁子(理工情セ)

情報センター職員研修計画(覚)

注) 当分の間、研修実施の基本方針・要領の覚えとしておくが、各方面のコンセンサスが得られたら、内規として規定化する。

はじめに

情報センター職員は、義塾において専門職としての職務を全うするという認識に立ち、そのことに対して誇りを持ち、高いモチベーションを保持し、常に、自己啓発するために努力を続けなければならない。

しかし、今日のように義塾および情報センターを取り巻く環境の著しい変化の下では、専門職教育において修得した知識・技術は急速に陳腐化する恐れがある。そのために情報センター職員に対し、継続的な専門研修の機会を提供する。

I. 研修の目的と基本方針

1. 義塾職員研修計画においてその部門別研修として位置づけられている情報センター職員研修は、

義塾の研究・教育・医療活動に対して学術情報を提供する職責を果たすため、職員の専門職能（知識・技術・意識）を高めることを目的とする。

2. 情報センターは、前項の目的を達成するために、塾内において専門研修プログラムを開発・整備するとともに、塾外各機関より提供されている各種研修プログラムを評価・点検し、総合的な研修計画を確立する。
3. 塾内専門研修および塾外研修に際して情報センターは、職員各自が積極的にこれらの機会を利用できるように配慮する。
4. 職員の研修成果を情報センターのサービス・管理運営に資するために、研修結果を評価し、情報センターの人事計画に役立たせるよう配慮する。
5. 義塾研修計画における他の研修プログラムとの整合性を十分に配慮する。

II. 研修内容

研修内容としては、基本的には、以下の各項目が挙げられるが、主題知識、外国語などはその性質上、自己研修に負うところが多い。

1. 専門的知識と技術

① 図書館・情報学

高度の図書館・情報学を身につけ、近代的な図書館サービスを展開できる能力（たとえば、書誌・参考図書知識、蔵書構築知識、資料組織化知識、蔵書管理知識など）

② 情報処理技術

図書館業務にコンピュータおよび各種ニューメディアを活用できる能力（たとえば、図書館機械化の基礎知識、プログラミング、外部データベースに関する知識、オンライン検索技能

など）

③ 図書館管理・経営

幅広い識見により効率的な図書館経営のできる能力（たとえば、調査能力、統計技能、コミュニケーション能力、分析能力、管理・監督能力など）

2. 主題知識

蔵書および学術資料についての知識を備え、学問分野に即した高度の情報サービスを展開できる能力

3. 外国語

- ① 外国語の資料組織化等に必要の基礎知識
- ② 図書館国際化傾向（外国人利用者の増加、図書館の国際協力の進展）に対応できる能力

III. 研修方法（年度別「研究教育情報センター研修計画」表による）

IV. 研修計画の管理・運営

1. 情報センター職員研修計画の管理・運営は情報センター副所長会議によって決定する。なお、支部センター固有の研修計画があれば同会議に報告する。
2. 情報センター職員研修計画を立案するために研修委員会（本部事務室所管）を設ける。同委員会は、副所長会議の決定にしたがって、年間研修計画の立案および報告書（人事部への報告、情報センター年次報告など）の作成、研修記録の管理、研修の評価を行う。
3. 副所長会議はその結果について評価検討し、情報センターの人事計画に役立てる。



カード目録からカードレス 目録への移行について

中 島 絃 一

(三田情報センターテクニカル・
サービス部長兼整理課長)

I. はじめに

三田情報センターでは、検索手段としてのあの伝統的なカード目録を維持することが、これを収容するスペース難やファイリング要員の確保難などの事情から、遠くない将来、必ず限界に達するものとの判断に立ち、新館建設以来折にふれて代替手段の検討を進めてきた。最近の目覚ましい電子技術の進歩によって、幸いにもこれを導入することによるカードレス化の目途が立ち、一部実施の段階に入っている。

そこで以下では、この計画の概略を報告し、利用者各位のご意見、ご批判などを賜りたい。

II. 移行の必要性

現在、三田情報センターでは、年間30万枚以上のカード目録を生産している。これらのカードは、検索語の記入、用途別の仕分け、プレファイルといった作業を経て、主に著者、書名、分類、書架、補遺、基本の6通りの目録ボックス別にファイルされている。

永年、図書館の検索手段のエースであり続けたカード目録は、しかし本塾大学のそのような大規模図書館にあってはすでにその限界がはっきりと見えてきた。特に以下に掲げるマイナス点の存在が、克服しようのない障害としてカード目録のこれ以上の継続を困難にし、代替手段への転換を迫っている。

- ① 著者、書名、分類カードを収容する1階の目録ホルのスペースが残り僅かで、あと2年～3年でその限界に達する。また、同様のことがその他のカードの保管場所についても

いえる。

- ② ファイリング作業の効率が次第に低下し、要員の確保も困難になりつつあって、整理業務全体にのしかかる重い負担となっている。
- ③ 一度ファイルされたカードの内容を修正する作業に多くの時間がとられるようになり、このことが整理業務の効率化を妨げている。

また、利用の観点からみても、カード目録を通じて文献を効率的に探し出そうとする利用者なら誰でも、年々複雑化するファイリングルールに習熟しなければならないが、そのような努力は必ずしも生産的とはいえないこと、カード目録の完全なセットは事実上一つしか作れないため、検索にはその設置場所までわざわざ足を運ばなければならないこと、などの不都合が存在している。

このようにカード目録の前途に存在する障害は極めて大きいものであるのに対して、一方では目録のカードレス化（電子目録化）の展望が明瞭に開けている。カード目録と対比した時の電子目録には多くの長所があり、特に以下の諸点において三田情報センターが直面する上記の諸問題を解決することができるものと思われる。

- ① 施設の有限性に制約されない。
- ② 検索効率を飛躍的に向上させられる。
- ③ 整理に要する時間を短縮できるため、より多くの図書をより短時日のうちに処理できる。
- ④ 修正、追加、削除等が容易に行なえるため、常に最新、最善の目録情報が伝達できる。
- ⑤ ファイリングの必要性がなくなるため、その遅れによる検索の不便が解消される。

たしかに電子目録には、端末がなければ検索できない、一覧性がない、一度に多数の利用者がアクセスできない、当初はコストがかかる、といった欠点がある。けれどもその長所は欠点を補って余りあるものであり、将来性も無限であるといつてよい。

以上の判断から、三田情報センターはカードレ

ス目録への転換を図るべく、以下のプロセスによってその第一歩を踏みだした。

Ⅲ. カードレス化の第一段階

先ず最初のステップとして、1988年1月1日以降に出版された図書のうちヨーロッパ系言語の洋書は全部カードレス化の対象とする。ただし、検索手段の効率化を別途検討中の雑誌資料、およびカードレス化のノウハウがまだ確立されていない言語、例えば、ロシア語、トルコ語、アラビア語、ペルシア語などの図書は当面これに含めない。

電子目録の作成は差し当たっては学術情報センターへの入力によって行なうことになる。こうして処理される図書のカード目録は、以後原則として作成しない。整理課の業務はこの部分の処理を第一優先順位とする方針なので、仕事の手順が軌道に乗れば、効率が大きく向上するものと期待される。

次に、すでにカード目録が存在している図書についても、遡ってこれを機械可読化することが必要である。これが実現すれば、既存の日吉キャンパスや新設される藤沢キャンパスの利用者に対しても大きな便益を供することになるからである。目下検討中ではあるがその具体的な方法として最も有力なのは、アメリカの世界最大の目録情報データベースOCLCの利用であろう。三田情報センターでは、すでにこの春このセンターのメンバーに参加し、専用端末を一台導入して日常業務の中に組み入れている。差し当たってはOCLCを利用して「B」記号の洋書を数年計画で機械可読化するという方法がコスト的にみて最もプラクティカルな選択肢ではないかと思われる。

Ⅳ. カードレス化の第二段階

次いで1993年頃を目標に和書のカードレス化に踏み切る必要があるだろう。和書については電算化のノウハウはかなり確立されており、実は洋書よりもカードレス化しやすい面を持っているのであるが、多数の学生利用者の同時使用に耐えられる設

備の提供という観点からみると、その機能をもつカード目録になおしばらくは働いてもらわなければならないのである。和書のカードレス化は多数の端末を必要とする。その条件の整備と目録ホルのカードの収容能力との関係から5年位先が妥当と考えられるのである。

ロシア語、トルコ語、アラビア語、ペルシア語、中国語、朝鮮語などの図書については原語での入力为目标とする。従ってこの問題は学術情報センターとの対応関係、コンピュータによる文字処理技術の進歩などをみながらその都度検討することになる。

Ⅴ. 検索方法

電子化された目録の検索は、端末の数もまだ少ないスタート当初は、特に新刊の洋書を求める利用者に多少のご迷惑をおかけすることになるかもしれない。けれどもそれは一時的な不便であって、年々その内容が改善されていく性格のものである。というのも、本格的で便利なソフト開発はこれから取り組みを開始するからで、これが完成し、専用の端末が利用できるようになるまでの1～2年間は学術情報センターの端末と冊子体目録の併用という変則的な体制をとらざるを得ないからである。しかし、3年目くらいから（この頃までには目録のデータベースもかなり大きくなって）専用の端末も導入され、かなり効率的な検索が実現しうる見込みである。専用端末は研究室をはじめ、三田情報センターへの頻繁なアクセスを必要とする所に配置することを目指している。

カード目録のカードレス化という計画は、情報センターの力だけでは到底進められるものではない。計算機資源の利用という面では計算センターの協力が絶対に不可欠だし、変化に直面する利用者の支持が得られなければ計画は途中で挫折するかもしれない。三田情報センターは、関係する各位との密接な協議を経ながら、この計画を着実に推進していく必要がある。

シカゴ大学は特別さ

— ビブリオグラフィック・
インストラクション —

市古 健 次

(三田情報センター選書課係主任兼
情報サービス担当係主任)



I. はじめに

「シカゴ大学は特別さ。」
これは1988年5月にオハイ
オ州のポーリング・グリーン
で開かれたLOEX大会
で同席した図書館員から聞
いた話である。確かにシカ

ゴ大学は、学生数から見ても、学部生3千、大学院生4千人と典型的な大学院大学である。さらに学部生数と教員数の比率は3:1と、これだけの数値を示している大学は全米広しと言えども見あたらぬ。

米国でも珍しいこのシカゴ大学図書館で研修する機会を得、1987年10月から88年7月までの約10カ月間滞在した。その間RLINのCJKを用いて目録業務を手伝うほか、ビブリオグラフィック・インストラクション(利用指導、以下BIと略す)に焦点を絞り、中西部、東部の10大学図書館を訪問した。BIに関連してライブラリー・スクールにおけるBIの授業と学部の授業を取り、さらに米国学生用に日本関係参考図書一覧(An Interdisciplinary Guide to Reference Books on Area Studies, JAPAN. Chicago, 1988. 77 p.)の編集を行った。そこで、シカゴ大学における授業・カリキュラムと図書館との関係を中心にBIについて述べていくことにする。なおシカゴ大学には人文・社会科学系図書館として学部生用のハーパー(Harper)図書館と院生用のレーゲンシュタイン(Regenstein)図書館がある。シカゴ大学の全蔵書数は約500万冊に及ぶ。

II. 図書館の存在

授業・カリキュラムと図書館との結び付きは、やはりコースシラバスにある。一般的にコースシラバスは、2、3ページで、科目の目的、試験とレポート、毎週の授業の予定、そしてリーディング・リストから構成されている。またライブラリー・スクールの科目のコースシラバスになると、10数ページに及び、リーディング・リストもかなりの数の文献を掲載している。リーディング・リストに基づき、図書館はリザーブ・ブックを揃えるわけである。大学院生用のレーゲンシュタイン図書館のリザーブブック・コーナーにはゼロックス化された雑誌論文も用意され、その徹底さには驚くばかりである。

学部生、大学院生を問わず、図書館をよく利用している。ある学生に「なぜいつも図書館にいるのか」と聞いたら、「寮は騒がしく、勉強できない」との返事。図書館にいる学生を観察すると、学生は様々なことをしている。静かに勉強している者、議論している者、だべっている者、デートしている者、飲食している者、そして寝ている者。図書館は学生の行動に対応するが如く、キャレル、ロッカー、ソファー、そしてカフェを提供している。こうして見ると、寮設備があるという環境も手伝って、図書館は単に学習、研究の場ではなく、たべり、デート、そして睡眠の場でもあるようだ。

夏休みに入ると、学生は荷物諸とも寮をでなければならず、夏以外、大学は学習、研究、娯楽、アルバイトの場であり、学生はすべて大学を中心に生活している。その中で図書館の重要性はかなり高い。日本では校門を出ると、大学、図書館との関わりは殆どなくなる。確かに日米では、大学、図書館の存在に大きな相違があるが、学習・研究の場である図書館本来の機能には違いはないはずであり、その側面を見ていくことにする。

III. BI

“One Shot Lecture”とよばれる図書館員によるBI(三田でゼミ単位に実施している利用指導に相当するもの)は米国大学図書館では完全に定

着している。米国におけるBIの課題は、LOEXの今年の大会のテーマにもなっていたことでも明らかのように、増加しているアジア系留学生や高校生に対するBIをいかに行うかである。さらにCAI、CD-ROMやOPACなどの利用も焦点になっており、88年7月のALA大会のpre-conferenceとして開かれたACRLのBibliographic Instruction Sectionにおいて議論がなされていた。

シカゴ大学図書館においては、図書館全体の概要を知るオリエンテーションはハーパー、レーゲンシュタインの両図書館で新学期がはじまる10月に自由参加方式でツアーを実施している。さらにレーゲンシュタインでは秋と冬のクォーターのはじめにOPACのデモンストレーションを実施し、検索例を示しながらオンライン・カタログについて説明している。BIは実施していないと聞いていた。

BIについては些か失望していたが、研修も後半に入った5月、あるレファレンス・ライブラリアンと話していたら、突然「各ビブリオグラファーが先生のリクエストに応じてインフォーマルにBIを実施している」というのである。それを聞く以前にパブリック・サービスのヘッドであるハワード・ディロン氏にシカゴがBIを実施しない理由を聞いていたので、余計驚かされたのである。

早速、人文・社会科学系の15名のビブリオグラファーを尋ねたところ、音楽、美術、地理学・人類学、ロシア文学、社会学・教育学担当である5人のビブリオグラファーが実施していることが分かった。対象はすべて大学院生である。各ビブリオグラファーは配布用に文献目録、参考文献一覧を編集しており、熱心に行っていることがうかがわれる。美術担当のキャサリン・ハスキンス女史はこうまで言ってくれた。それは“I consider BI a major component of my job.”である。

分野別にコレクション・デベロップメントとレファレンス・サービスを主に担当しているビブリオグラファーの職務内容説明書(Job Description)を見ると、BIは職務に組込まれていた。BIは

他の大学においてもビブリオグラファーか、レファレンス・ライブラリアンによって行われている。ディロン氏との話からも判断すると、BIは各ビブリオグラファーの自由裁量にまかされているようだ。全米で学部生にフォーマルな形で定着しているBIを、シカゴが大学院生にインフォーマルにしか実施しない理由も決して見逃すことができない(筆者傍点)。ちなみにディロン氏はシカゴに移る10数年前、イリノイ州にあるサンガモン州立大学(Sangamon State University)の図書館員であった当時、BIを促進させる論文を書いており、かつ筆者もそれを読んだことがあるので、ディロン氏には関心を持っていた。BIをフォーマルに実施しない理由は、1)機械化とコレクション・デベロップメントに重点を置いていること、2)大学院大学であること、3)教員が関心を示さないこと、4)ジェネラル・レファレンス、4つのサブジェクト・レファレンス・カウンターおよび、利用者からアクセス可能な各ビブリオグラファーのオフィスがあることである。

4つの理由の中でネットワークに参加せず、独自に開発しているコンピュータ化の負担はかなり大きいようである。また大学院大学で研究、研究者養成に力を入れていることも確かである。その点は“Collection Development Policy Statement”を見ると、一目瞭然である。ディロン氏が示してくれた問題のなかにはBIばかりでなく、日本の大学図書館における課題を含んでいる。

IV. 終りに

シカゴ大学をはじめ、ほかの大学を見ると、学部、学科によって相違はあるものの、講義中心である。一般に授業のやり方として、講義を中心とするフランス式、セミナーを重視するドイツ式、そしてマン・ツー・マンのオックスフォード・ケンブリッジ式がある。米国の授業形態も基本的にこの組合せでカリキュラムが構成されている。日本の授業も講義、ゼミ、そしてマン・ツー・マンの卒論の組合せから成っている。

学生と教員の比率の相違のほかに、教育方針の違いが私には印象に残った。先生が講義をしてい

る途中でも学生はすぐ質問する。そしてそこから議論がはじまることがしばしば見られた。米国の教育方針はギリシャ哲学、いわゆるソクラテス、プラトンの対話術、産婆術、即ち対話によってその人が内面に持っているものを引出し、それを個性として伸ばす方法に基づいている。従って観察力、思考力、表現力を重視している。そうした能力は大学へ入る以前に訓練されている。一方日本は小中高と教え込み、暗記を重視しており、儒教

の側面が色濃く反映している。そのため大学へ入っても、持論を展開することが余りうまくない。図書館の利用に関してもそうした面を反映している。教育方法を多様化させているのがゼミ・卒論である。図書館がそれを援助すること、即ちB I, ビブリオグラフィック・インストラクションの実施は、米国に見られる授業・カリキュラムと図書館との有機的結合を日本の大学図書館に育てる契機になるであろう。

藤沢新キャンパスにおける研究・教育メディアサービス

以下は、新学部検討委員会第二委員会専門分科会において検討され、この4月から5月にかけて塾内に報告され、承認をえた『藤沢地区事務体制のあり方、目指すべき方向について』よりの抜粋である。このことについては、いずれ本誌において特集を組む予定であるが、同キャンパスでの図書館サービス計画について関心が高いのでここにこれを掲載する。

【研究・教育メディアサービスの目的】

(1) 学術情報媒体の収集・管理・運用の側面で総合政策・環境情報両学部での研究・教育をサポートする。(2) 学術情報流通およびデータベース構築にかかわるシステムを整備する。(3) 外国語教育および情報処理技術教育に必要なサービス、その他の視聴覚教育に関するサービスを提供する。(4) 情報処理研究や情報システムの開発・構築にかかわる研究をサポートする。

【サービス内容】

(1) ライブラリーサービス ①印刷媒体、デジタル記録媒体、録音・録画媒体などあらゆる情報メディアを収集、整理、保管、提供する。②各種情報メディアの閲覧、貸出、レファレンスサービスを行う。また、目録情報はオンライン検索できるようにする。③図書館利用教育プログラムを実施する。④図書館資料に関しては、慶應義塾図書館をソースライブラリーとし、塾内の他の図書館と分担収集を図る。また

他の図書館の目録情報をオンライン検索できるようにする。⑤各種メディアの発注・受入・整理・保管に関するデータ処理を機械化する。

(2) データベース・プログラミングサービス ①塾外を導入(学外データベースへのアクセス、情報検索、初期加工など)し、その利用に関するレファレンスサービス、プログラミングの支援などを行う。②研究・教育に必要なデータベースの構築(コンピュータ利用学習のソフト開発などを含む)を支援する。

(3) 外国語・情報処理技術教育・その他の視聴覚教育関連サービス ①外国語教育カリキュラムの必要に応じ、ライブラリーサービスに必要なメディアを収集(場合によっては、加工・製作)し、必要な装置を整備した教室を設置する。②情報処理技術教育のカリキュラムの必要に応じ、必要な装置を整備した教室を設置する。③その他のカリキュラムにおいて必要となる視聴覚メディアを収集(場合によっては、加工・製作)し、その利用を支援するための施設・装置を設置する。

(4) 情報処理研究や情報システムの開発・構築にかかわる研究のサポート

(5) 事務情報の電算処理 学事事務・総務事務両部門および当メディアサービス部門で必要となる事務・サービス上の情報処理を全塾情報システムに基づいて行う。

大学と映画

橋本 順一

もう5年以上も前になるが、フランスに長期滞在する機会を得たことがある。私が所属していたのは南仏のモンペリエ大学に設置されているCFP(Centre de Formation pédagogique)であったが、ここで私は大学と映画の結び結び得る関係の具体例を眼の当たりにし、少なからぬ衝撃を受けたのである。

CFPは、言うなれば「フランス語を母国語としない外国人フランス語教育者のための養成研究センター」で、モンペリエ大学文学部に付属していたが、ここの学生（といっても大部分が中年の、現役のフランス語教師たち）は、時間割のやりくり次第で文学部の設置科目を受講してよいことになっていた。そして、CFPと文学部のいずれの時間割にも「シネマ」という講義タイトルを見つけた私は、ためらわず、双方ともを受講することに決めたのであった。

その授業内容だが、CFPの方は、映画を通じてのフランスの歴史と文化の紹介を主眼としているせいか、日本ではまず公開されそうもない、固く、地味な作品ばかりを見せられた。担当教授の解説も、ストーリーの注釈や歴史的背景の説明に終始しており、どちらかといえば、映画を^{フィルム}読本に見立てての語学教育という傾向が強かった。ただ必ず学生同士の意見交換というか、論争のための時間が割いてあり、相互にたどたどしいフランス語を駆使しての、しかし白熱した議論のやりとりが延々と続き、おおむね退屈な映画のあとではこちらの方がむしろスパクタクルとして楽しみであった。

これに対し、文学部の授業は、より映画本位で、映画史と映画の詩学に重点を置いたプログラムであったといえる。初期の無声映画に始まって、ヌーヴェル・ヴァーグまでの「代表的」作品を10本余り上映し、担当教授の示唆と参考書リストに従って、学生（こちらはほとんどフランス人の若者）が2～3

人で組になって、個々の作品について口頭発表をするという、半ゼミナール形式のもの。CFPではフランス人監督によるフランス語の作品ばかりだったのに対し、こちらでは最後に上映したA.レネの『ミュリエル』(Muriel)を除けば、残りはすべてドイツ映画か、ハリウッド映画か、ソ連映画であった。その事実からうかがえるように、^{フィルム}各映画の文法・美学・構造・技術の特質を抽出することが学生たちに求められていたようである。いずれにしても、他の芸術分野に比べて誕生以来日が浅いとはいえ、美術や音楽や文学と並んで、映画が人文科学の正科の一つとして日本の大学に定着してもおかしくはないという確信を強めたのは、この授業を通してであった。

どちらの授業も収容人員250名ほどの階段教室を用い、35ミリフルサイズの映写機を備えた映写室に専任のオペレーターがいて、教師は自ら機械を操作する必要もなく講義に専念していたが、興味深いのは、同じ教室、同じ設備を学生のシネ・クラブに解放していた点である。これは勿論夜間に限られるが、毎週のように手軽に映画を楽しめる場を大学が提供できるということは羨ましいと言わざるを得ない。

現在、日吉情報センターにはビデオカセットの形で110本ほどの映画が^{フィルム}存在するし、LL教室や各国語研究室にも総計すればかなりの数の〔映画〕がある。一見、映画の置かれている状況は良好であるかの印象を与えるが、しかしコレクションの大部分が、語学教育を口実とし、にもかかわらず（外国人留学生のためにさえ！）邦画をただの1本も持たぬということは、やはり恥じていいのではないか。別に日本の政治が、フランス流の対外文化政策を伝統としてこなかったことを誇るには及ばないが、映画というインターナショナルな芸術媒体は、使用されている言語によって色分けされてはならないのだし、特定の言語習得のために利用されはしても、それを主たる目的とするのでは、余りにも映画にとって不幸である。

ともあれ、大学における映画の地位というもの積極的に、長期的な視野と展望で考えねばならない時期は、とうに熟している。

(商学部助教授)

トラブルとそれへの対応

—盗難・事故・いたずら—

渡部 満彦

(三田情報センター閲覧課長)



編集委員から図書館で発生するさまざまなトラブルについて書くようにとの命を受けました。多分、われわれ図書館員が出合う大小のトラブルは学生部その他が出合うそれに比べればまだ

まだまだ深刻と言えないでしょうが、そのいくつかは相互に注意すれば未然に防止できるものもありますので、いくつかの現象について書いて見たいと思います。

I. 大きな迷惑

都内のある大きなホテルでのこと。結婚式を終えて引出物を抱えた黒装束の紳士淑女がロビーの隅にある売店で何やら見つけると、ロビー中央のソファに引出物その他の荷物を置いて、全員が売店の方へと行ってしまいました。無人の荷物を見て、一人のアメリカ人が次のような感懐を洩しました。「日本人というのはなんとナイーブで無防備な人間だろう。我々には考えられないことだ」と。

これに類することは図書館でも毎日見られます。大学には一応正門があり、塀や垣で囲われています。しかし、その内実は神社仏閣と同じで、その気になれば誰れでも入れます。《神聖な教場》である大学に、あるいは図書利用券または学生証による入館の際の、あの不快かつ厳重なチェックの図書館にどうして不心得者が居るだろうかと疑問を持たれることはもっともですが、物事完全ということはありません。

閲覧机やパーソナル・コピー機に財布や学生証の入った荷物を置いたまま、その場所を離れては

いけません。ほんの一、二分で戻るから大丈夫だと思っるのは危険です。盗難事故というのは一瞬のうちには発生します。最近の傾向としては銀行が営業していない土曜日に、盗難にあったキャッシュ・カードと学生証の誕生日から現金が引き出されるという被害が目立っています。

大学はその性格上、パイオレンス等には極めて無力です。ですから、大学の構成員一人々の注意にまつしかありません。若者というのはいつの時代でもそうなのでしょうが、「野暮」ということを嫌います。そのためか、男子学生も差別化が無理なポシュットをポケット替りにし、これに現金等を入れて、机に置いたまま席を離れます。これはどうぞお取り下さいと言っているようなものです。図書館や教室は個人の家や書斎ではないのです。貴重品は必ず身につけるようにして下さい。

これはあく迄、筆者個人の意見ですが、不注意による被害は被害者にも半分の責任があるのです。

図書館員は「保存か利用か」ということをよく問題にします。そして、これをカクレミノにして不便な図書館経営を行うという現象が生じます。

図書というのは利用されて初めて意味があるのです。利用もされず後生大事にしまって置くだけでは往來の石と変わりません。そこで塾の図書館では蔵書の大半に利用者が直接行って見ることができます。利用優先の思想です。

慶應義塾の図書館は福沢先生の個人蔵書から発展したものとされています。塾の発展と共にその時々の最高の努力によって蔵書が充実されてきました。この蔵書を慶應義塾が存続する限り、次の時代の塾員に継承していく責任を我々は負われています。いま諸君が手にしている一冊の図書は、かつて塾が輩出した各界の重鎮が手にしたかも知れないし、あるいはこれから来る真摯な塾生を裨益するかも知れません。保存も大切です。

このような「保存か利用か」の二律背反を解決させる装置として、出口に無断持出を防止するための警報機を取付けています。混雑時には列を作ることもありますが、貸出の手続は簡単に終了し

ます。無断で持出す規則違反はやめましょう。外部の一般利用者、塾員、諸学校の生徒が警告を受けるのは困ったものです。

「利用か保存か」の悩みの中で今一つ困るのは図書の切抜きです。これだけ複写機器が発達しているにもかかわらず、切抜きが後をたたないのはどうしてでしょうか。切抜かれた図書で補充の可能なものは全て再購入していますが、中には絶版で買えないものもあります。図書館の図書は利用されやすいようにさまざまな工夫がなされています。これに要する費用は図書の定価をはるかに上回ります。余分な出費を強いる他に切抜きは著者に対する礼を欠くことにもなります。切抜きは文化の継承の任を担われている図書館に対する隠微な挑戦です。勿論、切抜く人はそんな意識は毛頭ないでしょうが。

II. 小さな迷惑

現在の我々の食生活は大きく変わりつつあります。学生諸君は生協等で売られている透明パック容器の弁当にコーラやジュースで昼食を済ませています。ご飯とコーラという取合せに筆者は肌粟立つのを憶えますが、彼等はこれらの飲食物を平気で図書館に持込みます。伝統的な茶菓の風習を駆逐した巷の商業主義と、これまた日本の伝統であった水のうまさを高度経済成長が犠牲にした結果、これ程の清涼飲料水の氾濫を招ねいたのでしょうか。

「不易流行」という言葉があります。変わらないものと変わらなければならないものと、または変えてはいけないものと。図書館は、特に慶應義塾図書館は学術図書館です。いわば食堂ではないわけですから、矢張り図書館内の飲食は遠慮して欲しいと思います。人前で無闇に飲食をすべきではないという戦前の精神論はとも角、コーラ等は図書館資料を汚損する危険があるため持込みは禁止です。

他の図書館の利用者について筆者は知ること少ないのですが、塾生諸君は我々の学生時代と比較して、実によく勉強すると思います。そして、スマートかつのびのびと学生生活を謳歌していると

思います。ただ、この特質は、時に傍若無人な振舞と紙一重なところがあります。多分、女子学生が増えたということにも原因があると思われるのですが、教室でも平気で私語をするようですし、図書館でも試験期にはかなり騒音公害の観を呈します。図書館ではあくまでも塾生諸君の良識に期待しているのですが、時偶に先生や他の利用者から私語を注意して欲しいとの苦情を受けます。図書館内では「静粛に」というのは「不易」でしょう。

明治45年に竣工したという旧図書館にはステンドグラスがあり、震災に会ったものの現在は復元され、階段を上下する人々の目を楽しませてくれています。これと同じように新館図書館にも、絵画・彫刻がいくつか配置されています。美を愛する心は愛智にも繋がります。無断持出防止装置の脇の壁画は人を待合せたりしている時に、決して寄りかかることのないようにして下さい。

幸い現在までに大きな人身事故は発生していませんし、女子学生に対する性的イタズラ等の報告も受けていません。ただ、書庫は広いので充分注意して欲しいと思います。

III. 入館チェックの意味

義塾図書館は地の利の有利さと冷暖房完備の居住性、それに一万円札の効用かさざまな人が訪れます。放っとけば他大学や予備校生に閲覧席を占有されますし、新婚夫婦が見学に訪れたりもします。既述したようにプロの作業と思われる盗難も発生しています。

事故防止のために我々図書館員も努力を怠っているわけではありません。ここまで大きくなった慶應義塾では教職員、大学院生、学部生の全員について図書館員が周知するのは不可能です。

入館チェックされる塾関係者には不愉快でしょうし、チェックする我々にしてもかなり消耗するトリビアルな仕事です。しかしやらざるを得ないのが現状です。小学生以下の児童を叱る時でも心の痛みは感じるものです。まして紳士である利用者とのトラブルは我々にとっても利用者にとっても不快でない筈はありません。ご協力を切に願う次第です。

看護短期大学図書室のオープンと 今後の課題

市古みどり
(医学情報センター)
情報サービス担当

I. 図書館開室の準備

慶應義塾看護短期大学はこの4月に開校した。短大図書室は医学情報センターの職員を中心にオープンに向けての準備が進められ、オープン後も同センターの職員が、管理・運用にあたっている。

開室準備の具体的な作業の開始は、61年3月に行われた厚生女子学院図書室の蔵書点検であった。これに基づき61年7月の短大設置一次申請のための厚生女子学院の図書室蔵書リスト作成が行われた。

その結果、基準から不足する図書の補充計画が打ち出され、三田および日吉情報センターからそれぞれ約500冊、約1,500冊が62年4月までに保管転換された。さらに、新規購入によっても、不足している分野の補充が行われた。

これらの図書は、目録・分類とも不十分であったため61年4月より再整理作業が開始され、62年8月末までにほぼ終了した。

62年6月の設置二次申請時には、一次申請以降の追加分蔵書リストを提出し、同9月に視察を受けた。そして同12月18日に短大設立認可がおりている。

62年8月以降開室までに残された作業としては、運用要領・各種規定類の作成、図書室用品、事務用品の準備、移転準備であった。これらに関しては、62年11月より医学情報センターの各セクションの代表6人からなる看護短大図書室準備委員会を設け、情報センター側としての運用案を作成し短大事務室側へ提出した。

63年3月22日より4日間にわたって厚生女子学院図書室から新校舎図書室への移転作業が行われ、63年4月11日に床面積約200m²、総座席数

76、蔵書数約15,800冊、雑誌35種、63年度図書予算340万の図書室としてオープンした。

II. 現 状

1. 運 用

4月11日オープンから6月末までは、医学情報センター職員2名が中心となってその運用を行ってきた。7月からは、午前1人、午後2人という体制で運用している。開室時間は、月～金曜日は8:45～7:00、土曜日は5:00までである。午後4:30以降(土曜日2:30以降)は、学生アルバイト2名が貸出業務を行っている。

閲覧方式は、ほぼ医学情報センターの方式を取り入れ、開架式で図書カードと貸出スリップを用い、利用冊数制限を特には設けずに、雑誌は1週間、単行本は2週間の貸出を認めている。

選書は、主として「日販ウィークリー出版情報」をツールとして用い、情報センター職員3名が行っている。教員・学生からは、購入希望図書として、随時希望を受け付けている。

図書・雑誌の受入・整理等の作業は職員1名が、中心となって行っている。

2. 利用状況

図書室の月別利用者数(1時間ごとの平均在室者数、のべ人数ではない)を示したものが図1である。午後4時～5時前後が最も利用者数の多い

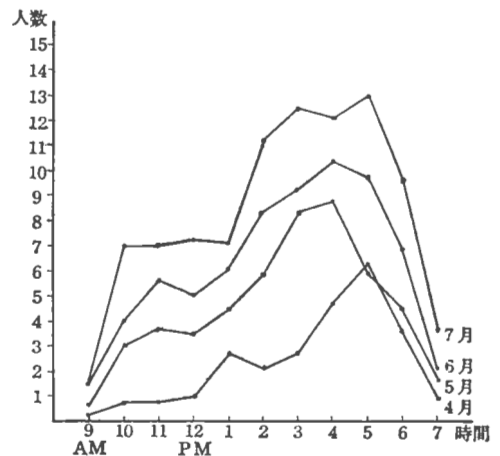


図1 月別図書室利用者数
(1時間ごとの平均在室者数)

表1 利用統計(貸出冊数)

内 訳 月	単 行 書		製 本 雑 誌		未 製 本 雑 誌		合 計	身 分 別 利 用 者	
	和	洋	和	洋	和	洋		教職員	学 生
4 月 (1日平均)	524	0	37	5	35	1	602	24	578
	32.8	0	2.3	0.3	2.2	0.1	37.7	1.5	36.1
5 月 (1日平均)	771	0	107	0	69	0	947	63	884
	33.5	0	4.7	0	3	0	41.2	2.7	38.4
6 月 (1日平均)	975	0	185	1	50	0	1,211	97	1,114
	37.5	0	7.1	0.0	1.9	0	46.5	3.7	42.8
7 月 (1日平均)	1,422	0	93	1	46	0	1,562	63	1,499
	54.7	0	3.6	0.0	1.8	0	60.1	2.4	57.7
計 (1日平均)	3,692	0	422	7	200	1	4,322	247	4,075
	39.6	0	4.4	0.1	2.2	0.0	46.3	2.6	43.8

表2 利用統計(分野別)

分 野		所蔵タイトル数	貸出回数※	1タイトルあたりの貸出回数
一般教育科目図書	人 文 科 学	576	104	0.18
	社 会 科 学	976	88	0.09
	自 然 科 学	270	4	0.01
	計	1,822	196	
語 学 図 書		209	3	0.01
保 健 体 育 科 目 図 書		65	0	0.00
専 門 教 育 科 目 図 書(看護学)		1,075	974	0.91
" (医 学)		2,330	468	0.20
計		5,501	1,641	

※ 7月2日までに返却された図書の貸出スリップから分析

時間帯である。これは、この短期大学および厚生女子学院の授業が、ほとんど空き時間のないカリキュラムであり、授業と授業の間には、本を返却する程度の時間しかないため、授業が終了する4時以降に利用が集中していると思われる。4時以前の利用者の多くは、臨床実習が中心の3年生であり、演習や勉強会のための準備をしたり、年間を通じて2週間設けられている卒論研究時間に、利用しているようである。

資料の貸出状況を示したものが表1である。単

行本・雑誌ともに貸出冊数は増加している傾向にある。図書と雑誌の利用の割合をみると、6:1で図書の利用が多くなっている。利用の集中する図書は分野別にみると、臨床看護系の図書である。(表2)また、授業および臨床実習内容の変わる月曜日に貸出冊数が多くなる傾向が出ている。

3. 主なサービスと広報活動
オープン後、4月21日より雑誌のコンテンツシートサービスを開始した。これは、その後毎月1日と15日を発行日と定め、

発行日までに到着した雑誌のコンテンツをコピーし、主に専任教員を対象として配布している。新着図書に関しても、適当な時期に、リストを作成して配布している。これらはいずれも現在は無料でやっている。

また、ニュースレターとして、「図書室インフォメーション」を発行し、広報活動も開始した。

相互貸借および文献検索サービスは、今のところ医学情報センターの窓口といった状態である。

Ⅲ. 今後の課題

図書室のオープンまでは、設置基準に合格するための量的な作業が中心であった。今後は質的な充実が必要である。

1. 蔵書の再点検

先に示したとおり、今までのところ看護学に関する図書の貸出が最も多い。しかも、特定タイトルに貸出が集中している。さらにこのよく貸し出されているタイトルのなかには、すでに改版が出ているにも関わらず、旧版のみしか所蔵されていないものも多い。かつて津田¹⁾が看護短期大学の図書室に関する座談会を行った記事の中で、古い本は一般の初心者、学生には罪悪と言うよりか、害をおよぼすとまで言っているが、この記事が発表されてすでに20年近くたっているにもかかわらず、状況はその当時の多くの看護学校の図書室とあまり変わっていない状態と言える。また、主題の偏り、欠如もみられるため、収書方針・計画を明確に表して資料の充実を図る必要がある。当面、この図書室は、医学情報センターと隣接していることからして、医学系の図書は医学情報センターにある程度依存し、心理学、哲学、社会学、教育学等の資料の充実を目指したい。

複本についても検討する必要がある。6月末現在平均複本冊数は2.8冊であり、中には全く利用されていないにもかかわらず20冊をこえるものもある。授業との関わりからすると、複本を全く置かないというわけにはいかないが、複本の必要な図書であるかどうかよく見極める必要がある。また、過去に購入された複本も、状況に応じて除籍等の処分が必要である。

さらに、雑誌はいわゆる看護学関係のものが中心であり、周辺領域の雑誌は受け入れられていない。また、看護研究にとって欠かすことのできない学会記録および紀要類もほとんどないため、雑誌と共にこれから資料の充実も、今後の課題である。

2. 参考資料の充実

看護学校の図書室が「調べる場所」としての整備が不十分であることが言われてから久しい²⁾。



この図書室も例外ではなく、利用者のニーズに応えるためには、今後精力的に参考資料を集めて行かなくてはならない。7月に、利用動向を調べるためにアンケート調査を行なったが、資料の探し方といえば、直接書架に行き行って本を開いてみるというパターンが定着しているようである。したがって、図書室にある本だけで、レポート等をまとめているのが実情であり、図書室にない図書や雑誌論文まで調べてみるという学生は、1・2年生ではほとんどいない。日本の看護学関係の索引類で、これを調べておけば一応十分であるといった資料は残念ながら存在しない。そこでこの不備を少しでも補うために、雑誌「看護」に掲載されている「看護関係雑誌文献目録」を利用して、カード形態の文献目録を作成した。今後できれば独自にインデキシング作業を行って雑誌記事の紹介に力をいれたいと考えている。

また、種々の参考資料を紹介するリストを作成中であり、リーフレットの形で図書室に備え付ける予定である。

現在最も力を入れて行くべき課題としては、上記2点であるが、今後も機械化をはじめ様々な改善点が出てくるはずである。それらを一一つ達成し、利用しやすく役立つ図書室とするために、今後も努力を重ねて行きたい。

- 1) 津田良成、野口美和子、内藤寿喜子、有馬千代子：“座談会 図書リストの作成” 看護教育 Vol. 11, No. 3, p. 13-24 (1970)
- 2) 山添美代：“看護における図書資源” 看護 Vol. 33, No. 7, p. 42-50 (1981)

「長いものにはまかれよ」 ということ

永崎 由紀子

図書館の仕事は標準化と縁が深い。多様を一様に納め、資料へのアクセスの道を開く。そのためツール（規格、基準、標準、規則、マニュアル、各種典拠等々）も数多い。円滑にかつ効率的にことをすすめるためには欠かせないものである。

この情報流通の世界ではとりわけその恩恵が大きいはずなのに、わが国の生産段階では未だ標準化が浸透していないようだ。雑誌の受け入れを5年間担当した私の実感である。これは、昨年行った私の調査「医学分野における学術雑誌の標準化—SIST 07 適用の現状」でも裏付けられた。雑誌に関わった方なら誰でもその多様性に泣かされた経験をお持ちだろう。本誌名さえ判断に迷う表紙の体裁、様々な論文の掲載形式、関係のわからない誌名変更等々。この様な事態を避けるために「SIST（科学技術情報流通技術基準）07—学術雑誌の構成とその要素」の存在がある。この調査では、医学雑誌100誌を対象にSIST 07の雑誌編集者への知名度と現物への適用状況を調べた。人文・社会科学に比べると明解な資料が多いといわれる医学分野であるが、結果は必ずしも「思わしくない」ものだった。原因は、SISTの普及活動にもあるが、生産に関わる人々の認識にもあると思われた。

標準化されずに困ることは雑誌ばかりではない。日常生活においてもビデオカセット、ディスクはもちろんのこと、ワープロ、パソコンといった情報機

器でさえ互換性が低く、消費者はその選択に苦慮している。

これらのことから私はよい意味で「長いものには巻かれよ」を是認し、広めるべきだと常々思うようになっていた。

そんな中、過日「科学技術情報の標準化に関するシンポジウム—SIST 制定15周年記念—」（1988年3月18日 於発明会館ホール）に参加した。この中の基調講演で中村幸雄氏はおっしゃった。「日本では古来、上から言われたことには服従せよ、長いものにはまかれよという習慣がありますが、それだけでは危険であり、本質を見極めなければいけません」という主旨だった。もっともしごくである。私の主張にただし書きが加わった。

長いものがあるからそれが絶対である、とは限らない。信頼を寄せている機械を使ってもミスはおこ

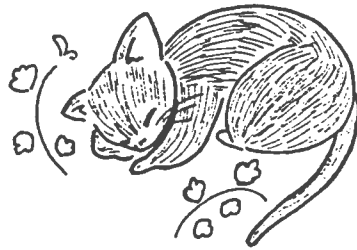
るし、権威あるNLMの目録にも間違いはある。基準の類もあまりに画一的すぎたり、特に情報流通においては取り決めが微細に及ぶすぎて現実的でないとといった不便がでる恐れもある。

しかし、現在は長いものの存在すら知られていないところがある。これではせっかくの存在意義も薄れてしまう。同じシンポジウムの席で、内藤衛亮氏が最後

に一言と求められ、おっしゃった。「このSISTにいったいどのくらいのお金と人力がつき込まれているか考えてください」と。

長いものに巻かれることの意義と、内容をよく理解し、さらに検討を加える態度を持つことが生産者側にも利用者側にも、標準化に関わる者すべてに必要であろう。

（医学情報センター資料サービス担当）



私の図書館回想 (3)

笠野 滋

(前研究・教育情報センター)
(本部事務室室長付)

9. 貴重書受入の見習と太田囑託、阿部司書

洋書の貴重書の受入については、経済学部卒の伊東晨君が、西暦1799年以前のものが貴重書で、1850年以前のものでが準貴重書扱いとなる旨の簡単な申継があり、それ以上の説明はなかった。初めて扱った貴重書が何であったかも覚えていないが、貴重ということでおっかなびっくり、慎重に取扱ったであろうと諦めていた。退職寸前にやっと記憶に辿りつくことができた。これについては本項の後段に譲ることにし、ここで私の履歴について少し触れてみる。

私は私立の小学校から慶應義塾の普通部に入学し、4年修了で昭和14年4月日吉の大学予科の経済学部に進学した。そして三田の学部へは太平洋戦争の始まった翌年の昭和17年4月に通い出した。授業期間は戦争のため最初に半年短縮され、第1学年は6ヶ月で、その間必修科目を含め10科目の履習しかできなかった。第2学年は1ヶ年間あった。戦運が悪化し例の東條首相の学徒動員令で第3学年は昭和18年11月に仮卒業の扱いとなって、学徒出陣させられた。残留していた学生が昭和19年9月に卒業したので、塾では昭和19年卒業で扱われている。殆どのものが軍隊や戦地に赴き卒業式にも出席できなかったし、卒業証書も貰っていない。散華した者もいる。私は海軍に徴集され、運よく復員できた。しかし家は世田谷の大原町で罹災していて辛うじて難を逃れた吉祥寺の家に、近所の工場に徴用されていた工具達の帰省と入れ換って落ちつき、疎開先から約3ヶ月かけて母達を迎えることができた。

焼跡の三田山上には復員したときの略装で訪

れ、塾監局の就職部に求人先を探しにいった。戦時下膨張をつづけた産業も、虚脱状態で従業員を揃って整理し、一方復員した従業員の就労問題も抱え、どの企業も採用どころではなかった。極度の就職難の時代だった。たまたま昭和21年1月に復刊した時事新報の記者の募集に応じ、幸い採用されて同年2月から、政経部記者として、焼野ヶ原の東京を駆けずり廻ったが、駆け出しの内に健康を害し、昭和23年2月には退社している。4年有余の闘病の後、藤山工業図書館にお世話になったときは29歳8ヶ月で、私は大正11年9月13日生れの戊年である。次いで三田の本館に廻った昭和31年7月には中年の33歳であった。昭和31年9月末には自宅の一部を増築して家内を迎え、その後2人の男児を得て、両親と同居をつづけている。

三田に廻ったとき、伊東主任が戦争末期短期間藤山に在職されていたことは聞かされていたが、戦前の時事新報に勤務されていた太田臨一郎囑託が、常勤で昭和30年から幸田成友旧蔵書の整理のため図書受入に働かされていたことは全くの幸せだった。私は先輩に助けられた。

『時事新報』は明治15年3月1日創刊、昭和11年12月25日廃刊となり、東京日日新聞に吸収されている。戦後復刊の時事新報の後輩ということで太田囑託は経済学部の卒業であるが、中年から塾の文学部の史学科の幸田成友教授の門下となり、教授の書誌学や日欧通交史の講義を受けたと明言されていたが、後に『幸田成友著作集』全7巻、別巻1冊、昭和46~49年の編集委員の1人として名を列ね、特に別巻索引は太田囑託自身が苦心して編集し、適切、正確であるとの好評を各方面で

受けている。私の洋書受入係転入と共に前記の「幸田文庫」に受入れて下さいとあって、受入伝票付の洋書を手渡された。幸田教授は大阪市史編纂に従事『大阪市史』明治44～大正4年、を世に送り出されており、明治43年以来塾の教員となり昭和19年退職、名誉教授となるまで文学部史学科の中心教授として江戸時代、外国貿易史、日本経済史の講義を担当された。その間日本近世史を追究するに従い、それに大きな影響を与えた日欧通交史に興味に移り、昭和3年5月文部省在外研究員として、ヨーロッパに赴き、オランダのヘーグに居を定めて彼の地の国立中央文書館を始め、各地の古文書館、図書館で根本史料を謄写し、あるいは古書店に貴重書を漁り、帰国後これらの史料を展示した「日欧通交史料展覧会」を昭和5年に三越で開いている。著書も極めて多く、収集された和書、洋書の図書や資料は膨大で広範囲に亘っていた。従って幸田文庫にはオランダ語の図書や、パンフレットも多く、オランダ語不案内の私は太田囑託の受入伝票から学ぶことも多かった。他にポルトガル語の図書もあった。ロシア語の図書は昭和35年頃から新刊の文学書を中心に可成り受入られるようになってきた。私は藤山時代の昭和29年10月から塾の外国語学校のロシア語に通い始め、2年のコースを無事卒業した。辞書と首引きで標題紙を読み、ポータブルの露天タイプを打ち、原綴のままのカードを作成し始めた。タイプは打つ機会も欧文に比して少く仲々上達しなかった。

私が受入れたときには幸田文庫本としてはロシア語のものはないと思っていたが、館内のカードに当たると昭和44年12月に、田中延枝君（現姓熊田）が、ゴロヴニン（В. М. Головнин）の日本幽囚記（Записки...）を英、独版等各国語版で受入れていた。これらは勿論、準貴重書となっていて幸田教授の「原典に帰れ」の収書方針が、幸田文庫には貫かれていた。

太田囑託は洋書課の方が混んでいると和漢書課の方に幸田文庫本を流して我々に一息つかせてくれた。また太田囑託は幸田教授が収集したあらゆる種類と、形態のパンフレット類をバインダー

（製本挟み）で巧みに製本され、背文字を貼って洋書、和書の扱いとして処理されて持ってこられた。そのお蔭で自然実物教育を受けることができた。勿論他日、別のパンフレットに自分で応用してみても背文字等仲々幸田文庫本のような仕上りにはできなかった。

また幸田文庫には蔵書票があり、このデザインは太田囑託の作成になるもので、簡潔で気品のある（Ex-libris Codanis 有三願楼 KEIO University Library）の文字が残されている。太田囑託によると「有三願楼」とは中国の碩儒の語で幸田教授が額にして号とされていた由である。太田囑託は服飾、衣服のデザイン等の研究家で、特に世界各国の軍服のデザインにも造詣深く、蔵書票のデザインはお手のものといった感じであった。

太田囑託は洋書課時代の広範囲に渉る収書の内私の力の及ばない幸田文庫の図書、史料を確実に処理して受入れ、支えられた。大学図書館の受入整理には、語学等でバラエティーに富んだ館員が必要であり、これは一朝一夕には養成できない問題である。

昭和37年の第三書庫の増築工事により余裕のできた書庫の模様替で、これまで貴重書は各所に分散されて収められていたものも多かったが、この機会に第一書庫1階入口南側の一室に集められ、貴重書庫が誕生した。太田囑託は伊東、石川両主任の他、堀田君等の協力援助を得てこれを整備し貴重書係の専任者となられた。（『館史』p.267）

さて野村館長、高村館長のとき受入られた洋書貴重書は経済学のものが多く、過去の架蔵も経済書が多かった。そのうちの幾つかは、三田での高橋誠一郎教授の講義で伺い、テキストとして使われていた『重商主義経済学説研究』改造社 昭和7年（6刷 昭和17年）の中で見覚のあるものもあり、同じく高橋教授の仙貨紙で戦後刊行された『西洋経済古書漫筆』好学社、昭和22年、に収録されていた西洋経済学古典等も結構あった。後者も時事新報退社後入手し、目を通していたので目録等の作成にはさして困難はなかった。

しかし阿部隆一司書だけは、司書講習以来の馴染であったが強い先輩で、貴重書は自分でその図

書にじかに手で触れ、手触りで紙質を探り、書誌事項を内容に則して書き留めねばならない趣旨の説明を繰返され、腕みつけられた覚がある。洋書目録の記述の際、LCの印刷カードの記述がどうなっているかということよりも、1冊1冊の図書を自分の力で調べねばならないというのが阿部司書の結論であった。

東大での講習中のある暑い日の午後、講義を終えての帰り途、阿部司書は風呂敷包みを小脇に、古書の勉強にと私を連れて弘文荘へ行った。学者町として定評のあった西片町の相当な邸の応接間に通され、和製本や、帙入本の山を脇にして反町茂雄氏と阿部司書は、お互に喋り、傾き合っていた。店舗でない古書肆を阿部司書は私に見させ、和本、漢籍に触れる機会を与えてくれた。弘文荘は、昭和も50年代になると三越の古書展で洋書も出品されたので毎年拝見したが、洋書受入係となつての1、2年は百聞は一見に如かずと古書展を覗き廻ったが、店頭から購入した貴重書は思い出せない。

阿部司書が奔走して和書関係の横山重氏收藏のお迦草子の諸作品が購入され、受入に廻った頃、横山氏の古書遍歴について『三田文学』の戦前の「書物搜索」の一文を推められ一読したが、その古書売買の生々しさに圧倒され、どうしたものかと一時は思い悩んでしまった。

塾へ入手、受入される貴重書は、しかるべき教員の推薦によるものか、研究書で典拠の確かなものに準拠し、図書館の蔵書の未収部分を埋める図書、新しく研究対象になると考えられる史実に関する資料、研究書等が念頭に去来したが、実行にはなお時間が必要であった。

暫くして、レファレンス・ルームの丸山信君が阿部司書と「西洋経済学古典調査」のため、貴重書目録法で、塾の西洋古刊本の目録採取を進めていることを側聞しても、私の方は日常の図書受入作業の渦中であつては、所詮高嶺の花とあきらめ貴重書目録入門の機会は失った。しかし国内の各大学図書館の洋書の貴重書目録や、展覧会、展示会の目録等は努めて収集した。

昭和35年3月高村館長の関西方面の出張に随行

し、天理大学図書館では富永牧太館長、河合忠信司書の案内で、同館收藏の和漢洋の珍籍、貴重書を目の当り見る事ができた。また教団の来賓者用宿舎で、一夕高村、富永両館長の書籍論談を伺う機会にも恵まれた。天理大学の洋書の貴重書目録には、河合司書等の手になる貴重書目録法に則った記述があり、後日重複の1冊は座右に備え、古書、貴重書への思を残した。

さて初めて扱った貴重書室には確か挿絵にキリスト教宣教師や教徒達の凄惨な磔や火焙の刑に処せられている光景があつたことに気がついたので、新館の貴重書で台帳を見せてもらおうと、昭和33年1月9日に Antonio F. Cardim の Fascicvlvs / E Iapponicis Floribvs, / Svo Adhvc Madentibvs Sangvine, ... の1本が受入れられていた。1646年刊のこの図書の受入には大変苦勞したものか図書に残されていたメモの購入日付、昭和30年6月より大部遅れていた。貴重書室の書架目録では、120 X. 48より以前のもは貴重書目録法の記述で目録が採り直されている。この図書は合刻で図書台帳には3標題が記入されているが、カードには頁付はない。念の為、丸山信君に見てもらっても自分は目録をとつた覚えはないという。購入先は一誠堂3万5千円となつていた。貴重書室で原本に当らせてもらおうと、メモがでてきた、私の字だった。正しくこれである。日本に布教にきた宣教師とその教徒達の殉教の様を伝えたカルディムの『日本血染の花束』等が収められていることが判った。導入はどうも阿部隆一司書であろうか、伊東主任司書も日本キリシタン殉教史については理解もあり、館長室で野村館長がこの資料を見逃す筈はなく受入れられたものであろう。旧図書館の分類では基督教(キリスト教)、双伝となつていた。

何分にも慶應義塾図書館は、当時和漢書の貴重書購入に高名を馳せていて、和洋の古書展や展示会に見学に行くと、洋書もどんどん購入しても当然ではないかとの書店側の薦めも受けたが、図書館洋書課時代には、未だ伊東主任を通じ、館長まで稟請する貴重書はなかつた。貴重書の購入には自分で貴重書を買取る若干の資力と西洋書誌学

の知識が必要であることを悟り、この時代にはむしろ、“Guide to Historical Literature.”や『西洋史料集成』に収録されている根本史料や研究書を館長や、伊東主任、学部の教員方にも助言を受けながら収集に努めた。幸い昭和32年から39年へ掛けての年代は発注して待てば、可成りのものが購入できた時代のように思う。

たまたま入手したり、選書で受入が決った経済学者や、著名な社会思想家の著書も、1799年の貴重書基準や、1850年の準貴重書基準に、すれすれで達しない図書も時折あった。教員側から、この本は当時極端に少なくなった、稀にしか市場に出ない、今貴重書、準貴重書指定をした方が良いと推薦されても、杓子定規に「年代が不足しているので」という私の説明に、貴重書受入の未熟さを度々見透されたかもしれない。

図書購入の収書担当には誰がなっても良いわけではないが、係となって購入を依頼されて、さて購入受入の手続は、一寸馴れば、誰にでもできるが、相手に納得して購入を見合せてもらい、しかも次回以降も同じペースで収書の依頼を受け、収書業務をつづけて行くのは、それなりに修練を要する。買うのは易しいが、断わるのは難しいという簡単な結論に達していた。

10. 新図書館計画実行委員会 その発足

忙しい最中の昭和36年2月24日私は突然伊東部長から呼ばれて、兼務でご苦労だが新しい仕事として新図書館計画委員会（委員長 高村象平塾長）の諮問に答え、実行委員会が本日開かれるが、その実行委員長（前原光雄館長）の下で各種の調査、研究の業務を事務局主任としてまとめて欲しいと申渡された。第一会議室で開かれた第1回新図書館計画実行委員会の雰囲気と委員の顔触れそして議事の内容は、私に有無をいわせないものであった。前原館長、柄沢副館長、小松房三藤山記念日吉図書館副館長、牛場大蔵北里記念医学図書館副館長、富沢豁工学部図書委員長（代理）平井新学生部長、今宮均研究室運営委員長、清岡暎一外事部長、等の外、特に橋本孝図書館学科主任は前原館長の左隣り2席目で、この会での重み

を示していた。前原実行委員長の隣は左右とも空席であったが、会の進行と共に高村塾長と気賀健三学務理事が出席し、会議を一段と引締める発言があった。図書館学科の澤本孝久事務主任は入口に近い処に席を構え、私には隣に席をとっておいてくれて、机の上には“MEMORANDUM ON THE FUTURE LIBRARY PLANNING PROJECT”（ALA 国際部長 Swank 氏に宛てた塾長覚書）の他「新図書館計画実施要領」と「事務局主任」、「企画」及び「調査分科会専門委員」（案）が配られていた。

新図書館計画委員会とは「実施要領」によると全整的構想に立って新図書館計画の大綱を定めるために、委員長に塾長を据え、常任理事、学部長、館長、図書館学科主任がそれに参画する。計画委員会の諮問機関には実行委員会があって、図書館長を委員長とし、委員は図書館学科主任、本館分館の副館長、研究室運営委員長がなり具体的計画を立案するというもので、その経過や背景といったものは良く解らず、後に『館史』（p.270参照）で承知した。

前原実行委員長は既にこの会に先立って2月6日行われた準備会での新図書館計画委員会の成立について経緯の概略を説明し、上記の人事（案）を提示して承認を求め、差当り企画分科会を開き調査の案を作ってもらおうといわれた。また事務局の所在についても検討されるが、塾監局3階外事部に同室と刷物には記されていた。また約50万円の予算について当局の内諾を得ている旨説明があった。

橋本委員から、本計画の実務に関しては笠野事務局主任は実行委員会に出席すること、事務局の職員については、その部署の長が超過勤務を認めるよう、また助教授クラスの人に専門委員を委嘱した場合の手当についてもこと細かに塾長に考慮を要望された。

高村塾長からは、嘗て10億円の新図書館計画案があったが、この委員会もそこまで計画するのか、又研究室を包含するものであるのかという質問があり、これに対して前原実行委員長から、具体的な案は委員会を開いて行くうちに決って行く

答である。橋本委員からはそういう根本的な点については本委員会を開き、大方針を決定してもらいたい旨要望した。今宮委員からは研究室を包含するものと解する、含むからこそ私も実行委員に加わっている旨発言があった。柄澤副館長から図書館学科は新図書館計画に際し、図書館の中に入るべきものなのかとの質問に対し、橋本委員は中に入るべきものと考えると言明された。

牛場委員から東大の新図書館計画について質問があり、前原実行委員長からその概略について説明された。平井委員からアメリカからの援助見込について質疑があった。橋本委員から視察団を派遣すること、向こうからコンサルタントを招聘することに援助を受ける見込があるが、その前に塾として自力でできるだけのことをしなければならぬと考える旨の発言があった。(「新図書館計画実行委員会 議事要録」昭和36年2月24日による。)

要するに前原館長を中心に企画分科会が方針や事業を起案する中軸となり、事務局は昭和36年4月から同じ洋書課に属する雑誌を扱う毛利信吾君と落合喜久子君とが、私と一緒に働いてくれることになった。

企画分科会委員は図書館学科の藤川正信専任講師と伊東総務部長、文学部の斎藤幸一郎助教授、図書館学科の澤本孝久主任補佐の4人であった。澤本事務主任は肩書が学科の主任補佐となっていて本委員会、実行委員会の幹事でもあって、時と場合に応じ職名、肩書を使い分け、委員会の総てを取り仕切っていた。

調査分科会の専門委員は図書館側から石川図書館部長、津田良成医学図書館主任司書、それに私に加えられていて、あとは文学部から清水潤三教授、鈴木孝夫、斎藤幸一郎助教授、経済学部高山隆三助手、法学部田口精一教授、十時巖周助教授、商学部庭田範秋、関口操助教授という顔触れであった。

実行委員会以上の会議での配布資料も重要なものは当初幹事止りで澤本幹事が持ち帰られていた。事務局の3人は本委員会(各学部長と塾長、学務理事、外事部長、図書館長、図書館学科主任

等)、実行委員会、企画と調査の両分科会のメンバーの名前と顔を覚え、如何にして会合通知を流し、出欠を誤りなく数えるか、それらの会合をまた何処で開くか、会議室の確保、お茶の用意、弁当の手配等がまず手始めになって、それぞれの本務を抱え、転手古舞をつづけた。その上各分科会の会議が終るとその都度議事録を草稿にまとめ、澤本幹事やそれぞれの分科会の座長格の委員の諒解をとって記録としておくため時間に追まわられていた。

第1回の実行委員会後数日経って塾監局の課長懇話会のメンバーの1人からいきなり「図書館は塾監局に乗り込む気か」と問われた。何のことかと問い返すと「塾監局の3階の外事部の部屋の入口を見る」というなり立去っていった。早速3階に上ると部屋の入口の右手に木の香も新しい目板に「新図書館計画実行委員会事務局」の看板が掛けられていた。部屋は覗いたが、新米の私には塾監局内の兼務の席とはいえ、敷居が高過ぎて到底入れない存在だった。如何に全墊的な新事業とはいえ、こんな高い所では図書館からも遠く仕事にならないからといって辞退し、事務局の3人は図書館のそれぞれの席で業務を行うことになった。

企画と調査の分科会がまず合同で3月16日に取り上げたのが「第1次予備調査報告」で、これは塾内の各図書館および研究室等図書に関係の深い機関に、昭和31~35年度の各種業務の統計の報告を求めるもので、職制を通じて依頼された。対象となった各機関では規模の大小を著るしく異にするので、比較対照する数値に大きな距りがあり、同一グラフでの対比等が、委員の注文通り行うには、片対数の指標を用いねばならなかったから、視覚的には極めて不便で、グラフの後には必ず数値表を記入してその点を補わねばならなかった。またこの報告書の末尾には各機関の用いている固有の図書分類表が収められているが、後日の利用に備えて分類表は別刷も作成された。

この5ヶ年統計に続いて、毎年度の実態調査の統計報告が続けられた。(以下『実態調査』第1次31~35、『同上』37等として引用)

また直ちに実行できるものとして、新しく改

革、改善の著るしい大学図書館、施設の見学が企画され、百聞は一見に如かずとばかり、年度末の3月30日に、バス1台を仕立てて、明治大学図書館（駿河台）と国際基督教大学に、参加者30名という画期的な視察が実施された。見学の詳細については後に述べる。

11. 同上 アンケート調査 三田地区・学生

しかし調査の内最も意欲的に力を入れて実施されたのは学生と教員に対して各地区毎に行われたアンケート調査であった。三田地区の場合については特に新図書館建設という目標が掲げられていたから大いに力が入った。調査分科会では7月4日の企画分科会との第3回合同分科会で、アンケート原案を9月上旬までに作成することでスタートしている。

「利用者調査（三田地区）」は調査分科会での討議、検討の結果、文学部の齋藤幸一郎助教授が「学生向けアンケート」の作成実施に当り、「教員向けアンケート」は法学部の十時巖周助教授が主となって行い、それぞれ実施の概要を分担執筆することに決められた。齋藤、十時の両教授のコンビは意気投合して起案の作業を開始した。

齋藤助教授は、『新図書館計画のための利用者調査報告（三田地区）』昭和37年5月刊（以上各地区調査報告は、『利用者調査（三田）』の如く略し、引用する。）の第1章 序で、学生向けアンケート実施の目的を、

1. 三田の図書館の「現状」およびそれに伴う諸条件下において、三田の学生達はどの程度に、そしてどのようにして図書館を利用しているかの 実態調査

2. 「現状」に対してどの程度に、不便を感じ欠点をみとめ、要望をもっているかについての 意見、態度、感想等の調査 の2つとしたと明記されている。

この「学生向けアンケート」は12月5日から8日の間に43の三田の教室で、教員と学生の協力と図書館員の援助により計画通り完了し、2737件が回収された。集計作業は12月15日から23日まで毎日8名乃至11名のアルバイト学生の手により行わ

れ、齋藤助教授が指導に当り事務局の3人が協力した。回答不備と見做されたものを除き、また男女の比較は文学部の学生のみを対象とするため、それ以外の女子学生の回答は除かれた。

有効回答数の内訳

三田の図書館に1回	文学部男子	171名
あるいはそれ以上入	文学部女子	214名
ったことのある学生	経済学部	521名
	商学部	696名
	法学部	652名
	計	2,254名
三田の図書館に一度	日吉の図書館	
も入ったことのない	を利用したこと、なし	44名
学生	日吉の図書館	
	利用、あり	269名
	総計	2,567名

（『利用者調査（三田）』p. 7 参照）

なお三田地区学部学生総数は10,353名であった。

齋藤助教授によるとこの調査は、各学部500名前後をとることが目標とされ、授業のため出席していたものを対象としたもので、ランダムなサンプルということはできないというわけで、その偏りも考慮に入れて控え目の推論がなされている。

また結果は、所謂単純集計の結果であるに過ぎず、そして諸条件をどのように改善すればどのような回答となるか、というところまでの結果を得ることはできず、ここにもアンケート形式の調査の限界があるともいえる。またオープン・エンド（Open End）の質問（自由回答欄）に対する回答の中には「現在の条件」をこえた回答があり得ると期待されるわけであるが、この種の期待は学生向けのこの調査よりも、教員向けに行われる調査の方に期待を寄せるべきであろうと齋藤助教授は仲々に慎重であった。

当時用いられた学生向けアンケートは前述の『利用者調査（三田）』の末尾にそのまま添付されている。白い用紙に印刷されてあるものは1から8までの質問群からなっていて、「三田の図書館に一度でも入った学生」向けのもの、黄色の用

紙に印刷されてある1から3までの3つの質問群は「三田の図書館に一度も入ったことのない学生」向けのもので、そのような学生には白色用紙の1～5までと黄色用紙の1～3まで、あわせて8つの質問群に回答させるようになっていた。(合計B4判6枚でアンケート用紙は構成されていた。)

勿論白い用紙の1～5までは所謂フェース・シート (Face Sheet) であって回答した学生の個人属性についての情報を得るための質問からなっている。白い用紙の第6群の質問は6a. 図書館に入る回数 (月平均), 6b. 図書館に入る目的, 6c. どんな時間を図書館の利用にあてているか, 6d. 図書館の利用をさまたげている条件, についての質問が含まれている。7では図書館の現状に対して開館・閉館時刻, 休館日, 閲覧冊数, 蔵書について, 閲覧手続および閲覧室の条件等である。8は将来の新しい図書館にはどのような条件を具備して欲しいかを聞いている。

昭和36年12月には第三書庫の増築工事が完成し, 翌年の昭和37年4月に増築部分に開架室が誕生し, 学生に対する貸出も積極的に開始され, 閉架式だった図書館は近代化の緒について利用し易い道を歩み始めたわけであるが, この調査は, 正にその直前に実施されたものである。紙面の関係で斎藤助教授の報告の個々のデータや「第3章 要約と考察」の総てを紹介できないのが極めて遺憾であるが, 9. 図書館の欠点についての意見の分布, 10. 新しい図書館への要望の分布を以下に再録しておく。

9 図書館の欠点についての意見の分布

順位	%	意見
1	29.9	書庫に立ち入れず, 従って, 書名だけで申込まなければならないから不便である。
2	18.7	館外借出しができない。
3	17.8	申込んでから書物が出てくるまで多くの時間がかかる。
4	14.2	閲覧申込の手続が面倒である。

5	5.1	閲覧室が快適でない。
6	4.3	係員が親切でない。
10.0		その他 (オープン回答および不明を含む)

10 新しい図書館への要望の分布

順位	%	意見
1	33.8	蔵書が十分に豊富で多様性のあること。
2	23.8	書庫に入って自由に選び出して読めること。
3	20.4	館外借出しができること。
4	7.2	建物が快適で照明, 椅子等の設備が行き届いていること。
5	4.8	館員, 係員のサービスが行き届いていること。
6	2.3	ほしい書物は希望すれば, すぐに購入し, 備えつけてくれること。
7	1.3	談話室, クローク・ルーム等の附帯設備がよく整備されてあること。
8	0.7	図書館には食堂があること。
5.7		その他 (オープン回答および不明を含む)

塾は昭和57年4月に昭和36年から数えて21年振りに三田に新図書館を建設し, オープンさせた。旧図書館, 研究室書庫をも含め統合の目的を達することができた。この2つの分布を一瞥することで, 往時の学生諸君が指摘した欠点は克服され, 要望もほぼ95%実現されたことは誠に心強いことである。

これも新図書館建設や計画に挺身された館長, 所長, 館員, センター職員のたゆみのない努力によって成し遂げられた成果であり, また歴代の塾長始め塾当局と関係者の並々ならぬ配慮があったことも忘れられてはならない。

(本回想記「同上 アンケート調査 三田地区・教員」以下は『慶應義塾図書館の回想 一司書の35年』として昭和64年4月以降, 著者により改めて刊行される予定。)

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1987.8~1988.7

〔研究・教育情報センター〕

“窓 研究・教育情報センター所長に就任した
清水龍瑩君” 塾 Vol. 25, No. 6, p. 33
(1987)

〔医学〕

50年のあゆみ 慶應義塾大学医学情報センター
39 p. (1987)
“医学情報センター（北里記念医学図書館）開設
五十年記念行事” 塾 Vol. 25, No. 6, p. 35
(1987)
根本進 “クリちゃんのまんがルポ「母校はいま」
11 関東編 一慶應義塾大学医学部一”
モダンメディスン Vol. 16, No. 12, p. 152-
153 (1987)
大沢充 “医学情報センター（北里記念医学図書
館）開設五十年記念に際して” KEIO病
院ニュース No. 66, p. 22 (1987)
三四会広報部 “北里記念医学図書館開設五十年

記念に際して” 慶應義塾医学部新聞 No.
437, p. 2 (1987. 11. 20)

高垣玄吉郎 “新図書館の建設を願う” 慶應義塾
医学部新聞 No. 440, p. 1 (1988. 2. 20)

〔日吉〕

“図書館のすすめ” 慶應義塾大学報 No. 192,
p. 3 (1988)
“図書館の使い方 慣れていない?” 東京大学
新聞 (1988. 7. 5) p. 2
五藤良子 “図書館の使い方” 三色旗 No. 481,
p. 29-32 (1988)

〔理工学〕

森園繁 “理工学情報センターの近況” 慶應義塾
大学理工学部報 No. 36, p. 16 (1987)
吉川智江 “資料室最前線③ 慶應義塾大学理工
学情報センター” 神資研ニュース No. 209,
p. 4 (1988)

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1987.8~1988.7

〔論文発表〕

〔三田〕

東田全義 “サヴァリ『世界商業事典』パリ

1723年” 塾 Vol. 25, No. 5, 表紙 p. [3]
(1987)

東田全義 “書誌学(2) 社会科学古版本と書誌”

第七回西洋社会科学古典資料講習会 一橋大学社会科学古典資料センター p.17-20(1987)

東田全義 “トマス・モア著『ユートピア』 パーゼル1518年11月版” 塾 Vol. 26, No. 4, 表紙p.[3] (1988)

平尾行蔵 “シリーズ・IFLA 東京大会 発表ペーパーを読む② 書誌情報” 図書館雑誌 Vol. 81, No. 1, p.16-19 (1987)

広田とし子 “アメリカにおける司書の専門職制度について” 塾監局紀要 No. 14, p.97-100 (1987)

市古健次 “近現代中国関係書誌一覧 pt.2” 書誌索引展望 Vol. 11, No. 3, p.25-31 (1987)

加藤好郎 “大学職員におけるリーダーシップ論” 塾監局紀要 No. 14, p.73-80 (1987)

加藤好郎 “研究者の研究活動と学術情報の生産性” 塾監局紀要 No. 14, p.116-117 (1987)

小川治之(高山正也ほかとの共著) “大学図書館における図書の貸出頻度についての確率過程モデルの検討—負の二項分布を中心として—” **Library and Information Science** No. 25, p.25-39 (1987)

柴野麻里子 “時系列的に見た研究者の論文発表活動” **Library and Information Science** No. 25, p.93-111 (1987)

渋川雅俊 “コレクション構築” 図書館情報学ハンドブック 同編集委員会編 丸善 p.504-506, 513-520, 523-533 (1988)

白石克 “朝鮮李朝末期の木製活字” 塾 Vol. 26, No. 1 表紙 p.[3] (1988)

白石克 “『元禄京都洛中洛外大絵図』(trésors 秘蔵5)” 三田評論 No. 887, p.76-77 (1987)

白石克 元禄京都洛中洛外大絵図 勉誠社 折り込み図1枚, 図4枚, 26, 19, 11p. (1987)

渡部満彦 “研修の意味するもの” 塾監局紀要 No. 14, p.9-13 (1987)

渡部満彦 “図書館と情報ネットワーク” 私立大学図書館協会会報第89号 p.98-122 (1987)

[医学]

後藤敬治 “1987年度 MEDLINE ファイルと

MeSH. (1) MeSH A-G.” 医学図書館 Vol. 34, No. 3, p.247-264 (1987)

後藤敬治 “1987年度 MEDLINE ファイルと MeSH. (2) MeSH H-Z と MEDLINE 関連事項” 医学図書館 Vol. 34, No. 4, p.331-341 (1987)

五藤良子 “図書館の使い方” 三色旗 No. 481, p.29-32 (1988)

市古みどり(杉山伸也との共編) 慶應義塾図書館所蔵戦前東南アジア関係文献目録 慶應義塾大学経済学部杉山研究室 137 p. (1988)

永崎由紀子 “医学分野における学術雑誌の標準化—SIST07 適用の現状—” 第14回医学図書館員セミナー論文集 p.90-100 (1988)

大沢充 “医学情報センター(北里記念医学図書館)開設五十年記念に際して” **KEIO 病院ニュース** No. 66, p.22 (1987)

館田鶴子(津田良成ほかとの共訳) “今日の医学図書館への挑戦” 医科大学における学術情報マネジメント 慶應義塾大学医学情報センター p.69-84 (1987)

館田鶴子 “MEDLINE データベースにおけるフリーテキストサーチの有効性” **オンライン研究** Vol. 8, No. 4, p.135-139 (1987)

吉岡菊子 “相互貸借における海外依頼文献の分析” 第22回医学図書館員研究集会論文集 p.105-107 (1988)

[日吉]

吉川智江 “資料室最前線⑨ 慶應義塾大学理工学情報センター” **神資研ニュース** No. 209, p.4 (1988)

吉川智江(上田修一ほかとの共著) **理工学文献の特色と利用法**(図書館情報学シリーズ8) 勁草書房 221 p. (1987)

[理工学]

森園繁 “理工学情報センターの近況” 慶應義塾大学理工学部報 No. 36, p.16 (1987)

〔研究発表〕

〔三 田〕

広田とし子 “アメリカ大学図書館事情” 私大図書館協会東地区逐次刊行物分科会夏季合宿
1987. 8. 25

長島敏樹 “MARC サービスの現状（国内）”
私立大学図書館協会東地区部会研究部昭和63年度第1回研修会 1988. 6. 9 於日本大学会館

小川治之（高山正也ほか） “高等教育機関の学習図書館における最適蔵書数決定のモデル化—慶應義塾大学日吉情報センターの貸出データをもとにした分析” 三田図書館・情報学会1987年度研究大会 1987. 11. 14 於慶應義塾大学

小川治之（高山正也ほか） “高等教育機関の学習図書館における分野別蔵書の利用化状況につ

いての統計学的分析—慶應義塾大学日吉情報センターの貸出データに基づく分析” 第35回日本図書館学界研究大会 1987. 10. 11 於法政大学

大橋史子 “資料保存の原則にみる日本の図書館の保存活動の状況” 資料保存研究会定例会 1988. 7. 15 於日本図書館協会

渡部満彦（パネラー） “図書館と情報ネットワーク” 私立大学図書館協会昭和62年度第48回総大会 1987. 7. 31 於鶴見大学

〔理工学〕

加藤孝明 “図書館の電算化—機械化の現状と意味—” 昭和62年度東京都世田谷区立図書館職員全体研修 1988. 2. 29 於世田谷区立世田谷図書館

慶應義塾大学情報センター刊行物

広重東海道五十三次 八種四百十八景
慶應義塾高橋誠一郎浮世絵コレクション
白石克編 小学館 154 p. (1988)

元禄京都洛中洛外大絵図
白石克解題 勉誠社 折り込み図1枚, 図4枚, 26, 19, 11 p. (1987)

三田図書館・情報学会月例研究会

第50回（63年1月30日）

「中規模大学図書館における図書館機械化の実際」

発表者 原田 悟（南山大学図書館）

第51回（63年3月12日）

「オンライン目録データの品質」

発表者 渡部満彦（慶應義塾大学三田情報センター）

第52回（63年7月9日）

「学術情報センターのデータベース・サービス NACSIS-IR」

発表者 根岸正光（学術情報センター教授）

第53回（63年9月17日）

「米国における図書館・情報学の動向」

発表者 R. M. Hayes（カリフォルニア大

学（UCLA）教授）

第54回（63年10月22日）

「大学図書館員の研修」

発表者 宮木さえみ（慶應義塾大学三田情報センター）

第55回（64年1月28日予定）

「日本目録規則1987年版」

発表者 牛崎 進（立教大学図書館）

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年刊の機関誌 Library and Information Science は、個人会費（年額 ¥3,000）、機関会費（年額 ¥5,000）を支払った会員に送付される。学会への入会、機関誌等に関する問合せは、慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-453-4511 内線3147）で受付けている。

年次統計要覧 <昭和62年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <62年度実績及び63年度予算>

内訳 支部センター	62年度実績 <単位:円>			63年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田情報センター	617,732,897	2,306,638	620,039,535	622,870	3,726	626,596
図書館	330,842,879	2,306,638	333,149,517	326,052	3,726	329,778
学部*	286,890,018	—	286,890,018	296,818	—	296,818
(私大研究設備相当額)	(45,470,000)	—	**	(21,470)	—	**
日吉情報センター	144,764,780	3,859,480	148,624,260	147,815	2,184	149,999
図書館	55,990,245	2,120,250	58,110,495	57,520	2,184	59,704
学部*	88,774,535	1,739,230	90,513,765	90,295	—	90,295
(私大研究設備相当額)	(7,285,090)	—	**	(7,286)	—	**
医学情報センター	133,495,780	2,712,420	136,208,200	133,496	2,795	136,291
"	133,495,780	2,712,420	136,208,200	133,496	2,795	136,291
理工学情報センター	122,111,203	1,464,240	123,575,443	122,103	1,463	123,566
"	122,111,203	1,464,240	123,575,443	122,103	1,463	123,566
指定寄付金	—	—	—	¹⁾ 47,175	—	47,175
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**	(1,300)	—	**
合計	1,018,104,660	10,342,778	1,028,447,438	1,073,459	10,168	1,083,627

注) * 特別図書費は含まず。

**私大研究設備相当額は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したものを。

1) 理工大学院増設図書整備費。

Ⅱ-1 蔵書統計 <年間受入れ及び所蔵冊数>

内 訳 支部センター		単 行 本			製 本 雑 誌			非 図 書 資 料	合 計	
		和	洋	計	和	洋	計			
年 間 受 入 冊 数	三田情報センター	25,326	30,012	55,338	8,036	8,236	16,272	10,012	81,622	
	図 書 館	(16,395)	(15,270)	(31,665)	(3,299)	(1,904)	(5,203)	(9,496)	(46,364)	
	学 部	(8,931)	(14,742)	(23,673)	(4,737)	(6,332)	(11,069)	(516)	(35,258)	
	日吉情報センター	13,196	6,686	19,882	2,204	2,819	5,023	669	25,574	
	図 書 館	(10,943)	(822)	(11,765)	(1,498)	(188)	(1,686)	(375)	(13,826)	
	学 部	(2,253)	(5,864)	(8,117)	(706)	(2,631)	(3,337)	(294)	(11,748)	
	医学情報センター	1,457	1,739	3,196	1,529	4,010	5,539	187	8,922	
	理工学情報センター	2,584	1,271	3,855	2,050	4,356	6,406	86	10,347	
	合 計	42,563	39,708	82,271	13,819	19,421	33,240	10,954	126,465	
	所 蔵 冊 数 (累 計)	三田情報センター	599,873	622,946	1,222,819	150,223	138,145	(288,368)	50,310	1,561,497
		図 書 館	(432,275)	(364,918)	(797,193)	(89,788)	(52,543)	(142,331)	(40,171)	(979,695)
		学 部	(167,598)	(258,028)	(425,626)	(60,435)	(85,602)	(146,037)	(10,139)	(581,802)
日吉情報センター		230,025	114,110	344,135	25,490	36,597	62,087	6,614	412,836	
図 書 館		(167,316)	(18,340)	(185,656)	(16,118)	(786)	(16,904)	(1,997)	(204,557)	
学 部		(62,709)	(95,770)	(158,479)	(9,372)	(35,811)	(45,183)	(4,617)	(208,279)	
医学情報センター		30,330	32,487	62,817	44,270	88,933	133,203	1,526	197,546	
理工学情報センター		36,529	24,658	61,187	33,541	92,882	126,423	393	188,003	
合 計		896,757	794,201	1,690,958	253,524	356,557	610,081	58,843	2,359,882	

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入れ冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。

2) 三田情報センター学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

3) 非図書資料の個数計上の違いによって資産として計上した総数と今年度は異なっている。

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 学部	5,252 (2,031) (3,221)	3,665 (897) (2,768)	8,917 (2,928) (5,989)	5,119 (3,166) (1,953)	2,497 (1,343) (1,154)	7,616 (4,509) (3,107)	16,533 (7,437) (9,096)
日吉情報センター 図書館 学部	882 (492) (390)	707 (43) (664)	1,589 (535) (1,054)	505 (191) (314)	976 (15) (961)	1,481 (206) (1,275)	3,070 (741) (2,329)
医学情報センター	1,263	1,643	2,906	783	1,223	2,006	4,912
理工学情報センター	1,040	1,388	2,428	2,719	4,837	7,556	9,984
合計	8,437	7,403	15,840	9,126	9,533	18,659	34,499

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	計	一般図書	貴重書	
三田情報センター	20,938	131,820	152,758	*	1,137	1.07
日吉情報センター	6,466	106,383	112,849	*	—	1.20
医学情報センター	49,427	14,852	64,279	*	—	0.96
理工学情報センター	—	—	56,338	*	—	1.04
合計	—	—	386,224	*	1,137	1.08

* 開架のため実数不明。

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	2,133	2	2,135	1,085	224	1,309	3,444
日吉情報センター	164	0	164	200	39	239	403
医学情報センター	10,396	154	10,550	1,967	108	2,075	12,625
理工学情報センター	34,056	0	34,056	1,234	73	1,307	35,363
合計	46,749	156	46,905	4,486	444	4,930	51,835

Ⅲ-3 利 用 統 計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	電子コピー (オペレーター付)	9,367	176,232	2,872	48,047	12,239	224,279
	簡易印刷	106	134,174	—	—	106	134,174
	OHP・スライド作製	47	250	—	—	47	250
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	1,350,861
	マイクロフィルム	15	4,891	32	5,839	47	10,730
	ファクシミリ	—	—	—	—	1,488 (送信)	1,678 (受信)
日吉情報センター	電子コピー (オペレーター付)	477	2,358	1	1	478	2,359
	電子コピー (セルフ式)	517	238,445	—	—	517	238,445
	マイクロフィルム	25	867	—	—	25	867
医学情報センター	電子コピー (オペレーター付)	54,501	360,436	126,344	725,202	180,845	1,085,638
	OHP・スライド作製	1,346	5,095	—	—	1,346	5,095
	ファクシミリ	—	—	—	—	240 (送信)	669 (受信)
理工学情報センター	電子コピー (オペレーター付)	117	875	34,053	310,629	34,170	311,504
	OHP・スライド作製	46	323	—	—	46	323
	電子コピー (セルフ式)	13,028	169,587	1,391	56,887	14,419	226,474
	マイクロフィルム	25	1,388	1	4	26	1,392

Ⅲ-4 利 用 統 計 <レファレンス・サービス>

利用者別

内 訳 支部センター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田情報センター	2,188	6,017	3,867	12,072
日吉情報センター	1,876	5,439	226	7,541
医学情報センター	1,658	114	2,522	4,294
理工学情報センター	912	2,996	2,450	6,358
合 計	6,634	14,566	9,065	30,265

Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

業務内容別

内 訳	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
支部センター					
三田情報センター	5,990	747	5,260	75	12,072
日吉情報センター	1,618	729	5,182	12	7,541
医学情報センター	2,256	1,570	466	2	4,294
理工学情報センター	4,562	682	994	120	6,358
合計	14,426	3,728	11,902	209	30,265

Ⅳ 職員数 (昭和63.3.31 現在)

センター名	事務員	事務嘱託	学生嘱託	合計
三 田	59	7	13	79
日 吉	25	2	8	35
医 学	20	1	1	22
理 工 学	14	2	2	18
全センター	118	12	24	154

注) 但, 兼務, 非常勤嘱託及び夜間(学生嘱託)を含む。

編集後記

資料保存の問題を本号の最重要テーマとした。ひと坪の地価が数千万円という三田に何年に一度かしか使われない資料を溜め込んでおくことに非効率を感じる下世話の価値判断からこれを取り上げたわけではないが、現実の問題である。図書館・情報学科糸賀君が学問的立場から基本的な解決策をまとめている。これに基づいて現実の解決策が立てられ、実行に移すことが迫られている。

『ドル安時代の円定価』は、円高と洋書の価格についての購買者の疑問に答えるものだが、円定価の決定にいろいろな要因がある。基本的には書

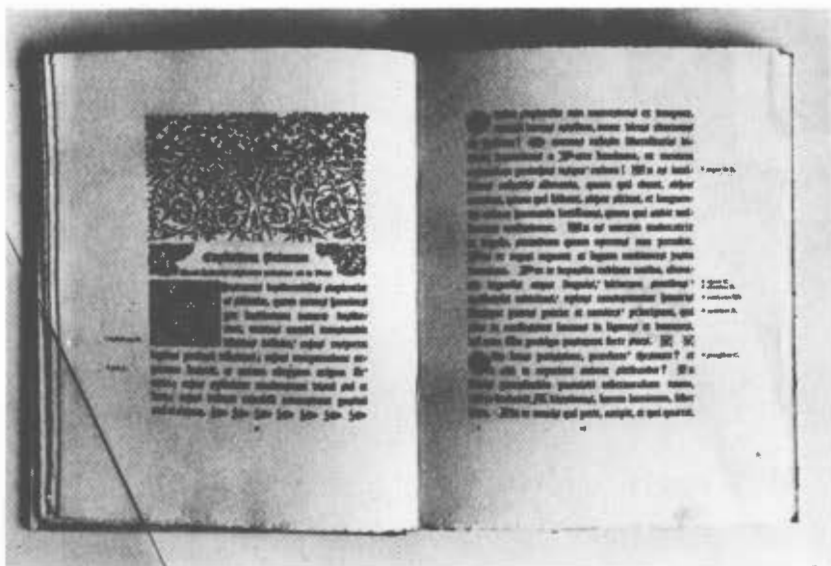
物という商品の特殊性か。

義塾利用者教育プログラムは、その内容においても実行においてもわが国のモデルとか、自我自賛ではなく、大学図書館界の評である。見直しをし、充実を図った研修制度もいずれはそうなるか。

しかし、よいことづくめではない。渡部君は“盗難・事故・いたずら”に苦悩する。それを子供のしつけの足らなさのせいにしても、見過ごすことができなくなってきている。(渋川雅俊)

編集委員*情報センター本部 渋川雅俊*三田情報センター 国井佐代子 徳井そのみ*日吉情報センター
吉川智江*医学情報センター 永崎由紀子*理工学情報センター 清野早苗

中世大学図書館運営法の始まりを読む



Ricardi de Bury • Philobiblon et optimis codicibus recensit.
Versione Anglica necnon et: Prolegomenis adnotationibusque
aurit Andreas Fleming West. Novi Eboraci, Typis et
impensis Societatis Grolierianae, MDCCLXXXIX.

本書は、1344～5頃に英国ダラム教会司教リチャード・ド・ベリーによって著された『書物への愛』（古田暁氏邦訳書名 北洋社 1978年）の翻刻（英訳テキストと解説付）でニューヨークのグロリアクラブより限定出版された、いわゆるプライベートプレス版の美麗本である。しかしこれを取り上げる理由はそのことではない。

本書には、ひとりの中世知識人の書物観、読書観が20篇にわたって、克明に書かれている。リチャードの書物愛は、人知への限りない憧憬であった。中世聖職者らしく彼は、それを神からの授かり物としたが、それが人間の最大の力であることを力説した。彼をしてあたりまえのことをそう主張せざるをえなかった背景があった。「自由なパックスはだれにも好れ、日夜酔いしれたが、書物の写本はだれにも嫌われ、手の届かない所に打ち捨てられた」（前掲）。知識の追求を本来の任務とすべき聖職者が、権力や名誉を求め、ときには、酒池肉林の生活を追い続けていることへの警告である。そして、彼は、自らがたどった人知へのアプローチを、若い学生に教授している。書物の収集法、選書の仕方、蔵書論、読書の方法とマナーなどなどである。

リチャードは、彼が生涯を通じて収集し、自らもそれによってルネッサンスの新しい思潮を吸収した蔵書を、目録を添えてオックスフォード大学の一学寮に送ることをこの本で遺言している。そしてまた彼は、この蔵書によって形成される図書館の運営についてもことこまかに書き残している。そこにいま私たちは、中世大学の図書館運営法の始まりを偲ぶことができる。

[波川雅俊]